

「家庭・CS・ 教会のトライアングル」

南陽教会 石田高保



努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならぬ。

申命記 6・7

両親でも片親でも、親がクリスチャンの場合、その子ども之魂に対する第一の責任は親にあることを、このみ言葉から明言しておきたいと思います。それはCSの先生がたが、クリスチャン子女の反応が鈍くても過度に責任を負わないためでもあります。先生がたには家庭との健全な境界線を引いていただきたいのです。一方、教会のメンバーも、「CSのことはCS教師に任せる」のではなく、一人でもいいから生徒の名前を覚えてとりなしたり、CSのオープンな行事があればヘルパーとして参加していただきたいのです。この家庭・CS・教会というトライアングルが信仰継承に力を発揮すると考えます。

この理念を実現するために、クリスチャンの親

には可能な限り、CSの先生になっていただくのが早道です。自分の子どもをCSに預けるという考え方ではなく、CSはクリスチャン家庭の聖書教育を補完するものと位置づけるのが聖書的だと思います。家庭の聖書教育と言っても、大げさなことではありません。わが家では子どもが小さいときは、ケネス・ティラーの『子ども聖書絵物語』を読んで聞かせました。今では毎朝、牧羊者の『子ども聖書日課』を彼らが読んでお祈りするだけです。このことをある児童伝道のエキスパートに話したら、「毎日続けるだけでも上出来ですよ」と励まされて肩の力が抜けたことがあります。しかし、その積み重ねはバ力にならず、最近はずどもたちが聖書の価値観で生きていることが垣間見えるようになりました。

しかし何といっても最高の聖書教育は親の姿でしょう。それは非の打ちどころのない親を目指すという意味ではなく、親が間違ったら子どもに素直に謝ることであり、子どもの小さな変化を大きくほめることであり、伴侶をいたわる姿などでしょう。家族との日常の人間関係こそ最高の学校ではないでしょうか。みなさん、「信仰のことはCSに任せる」のではなく、「家庭こそ、最も信仰を養える場である」という価値転換をしてみませんか。

牧羊者

目次

巻頭言	1
目次	2
カリキュラム	3
「二〇一三年度カリキュラム」解説	4
教師養成講座「カウンセリング・個人伝道①」	5
キリストの復活 《4/7 ～ 4/28》	7
使徒の働き・黙示録 《5/5 ～ 6/30》	31
牧羊ひろば（柏原教会）	85
「牧羊者」のご購読・ご利用について	90
おわりに	90

〔凡例〕

- 1、原語について：ギリシャ語は〔ギ〕、ヘブル語は〔ヘ〕、アラム語は〔ア〕で表記しています。
- 2、礼拝メッセージ例の最後の「さんび」の略記について
「ホーリネス・」〔ホ・〕……………日本ホーリネス教団
「インマヌエル・」〔イン・〕……………インマヌエル教会学校部
「日キ・」……………日本キリスト教団出版局

キリストにある生涯

IIコリント5・17

●キリストの復活

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
4月7日 進級式	信仰への招き	ヨハネ20・24～29	同27節
14日	夜明けに立つ キリスト	ヨハネ21・1～14	同4節
21日	わたしを 愛するか	ヨハネ21・15～23	同15節
28日	キリストと共に 遣わされる	マタイ28・16～20	同20節

●使徒の働き・黙示録

行事	テーマ	聖書	暗唱聖句
5月5日	キリスト再臨 の約束	使徒1・9～11	同11節
12日 母の日	祝福された人	ルツ1・15～18	同16節
19日 ペテコネ の恵み	ペンテコステ	使徒2・1～11	同4節
26日	キリストの名 による歩み	使徒3・1～10	同6節
6月2日	悔るべきでは ない神	使徒5・1～11	同11節
9日 花の日・ 子どもの日	キリストの香 りとして	IIコリント2・12～17	同14節
16日 父の日	神の子として	ガラテヤ4・1～7	同6節
23日	天からの光に 照らされて	使徒9・1～19	同3節
30日	マケドニヤか らの叫び	使徒16・6～10	同9節

二〇一三年度 カリキュラム解説

今年度の『牧羊者』カリキュラムは、一昨年から始まった三年カリキュラムの最終年（三年目）に当たります。以下、今年度カリキュラムについて、簡単にご説明致します。なお、三年カリキュラムの全体については、二〇一一年度第一巻のカリキュラム解説（四、五頁）を参照ください。

①新約聖書

新約聖書からは、今年度も、キリストの生涯全体をひと通り学べる形になっていますが、今年度の特色として、使徒行伝と黙示録を通しての学びが加わります。まず、昨年度終わりの受難週、イースターに続く形で、「キリストの復活」「使徒の働き・黙示録」まで学びます。一旦、「キリストの宣教開始」に戻り、「キリストの教えと働き」へ。「クリスマス」を挟んで、「キリストの十字架への道」という順で学びます。

②旧約聖書

旧約聖書からの学びは、三年かけてひと巡り学ぶようになっていきます。今年度はその最後として、「預言者」「捕囚期」「詩歌」を学びます。

③教会暦・行事を踏まえて

旧新約聖書を通しての学びの間に、基本的な教会暦や行事を踏まえた内容が入ります。パウロの手紙からのテキストも入ってきますので、噛み砕いて、分かりやすく語っていく必要があります。

④テーマ「キリストにある生涯」(Ⅱコリント5・17)

今年度のテーマとしては、「キリストにある生涯」としました。全体として、キリストに招くと同時に、キリストにある歩みを強め、励ます内容となっています。キリストにしっかりとつながり、キリストにあつて新創造された者として、一人ひとりが歩んでいけるように、祈りつつ取り組んでください。

「キャンプのカウンセリングと個人伝道①」

千里聖三一教会 金井由嗣



キャンプ・カウンセリングの特徴

バイブルキャンプでのカウンセリングの最大の特徴は、3〜4日間という短期間になされる、ということ。時間をかけて継続的に関係を築いていく教会学校の教師と生徒の関係とは、その点が大きく異なっています。カウンセラーは専門的訓練を受けているわけではありませんが、そこで初めて出会う相手と限られた時間の中で信仰に関する深い関心を共有し、良き導き手となることが期待されているのです。

こう書いてくるときわめて難しい働きであるように思えますが、これらの条件はプラスに評価することもできます。思春期の若者、特にクリスチャンホームで育って来た人は、自分の教会の牧師やCS教師には、かえって悩みを打ち明けにくい場合がしばしばあります。悩み事を話した後、それまでと同じように接していけるかどうか、不安に思ってしまうのです。キャンプで出会うスタッ

フは、信頼できる信仰の先輩であり、しかもキャンプが終われば当分会わなくなります。信仰に関する疑問や悩みを相談するには、格好の相手となり得るのです。

とはいえ、出会ったその日から真剣な話をするなど、普通はあり得ません。たださえ相手の目を見て話す事の苦手な世代なのです。「このカウンセラーなら自分の内面を見せても良い、信頼できる相手だ」と認めてもらうことができるか：キャンプでのカウンセリングの成否は、なによりもここにかかっています。つまり、この「関係作り」こそ、良きカウンセリングのための最初にして最大の課題だといえるでしょう。

キャンプ・カウンセリングの目標

キャンプでのカウンセリングに期待される結果（ゴール）は、一人一人違っています。画一的な結果を求めないように気をつけましょう。思春期のキャンパーが解決を必要とする問題は様々であり、神様の言葉が狭義の

「靈魂」の問題だけでなくその人の人生のすべての局面に光を照らすものであることを、彼らは経験する必要がある。もちろん、明確な新生の恵みを求めている人には、それに応える必要があります。つまり、個々人の具体的な悩みや問題に言葉から光を当てる「みことばに聴くカウンセリング」と、福音を個人的に適用し信仰告白に導く「個人伝道」とは明確に区別される必要があります、そのどちらもキャンプ・カウンセリングの目標であり得るということです。ですから、カウンセラーはまず、キャンパーと一緒にあって「このキャンプでのゴールをどこに求めるべきか」を見定めていく必要があります。

「聞くカウンセリング」の重要性

以上のことから、キャンプでのカウンセリングにおいてはまず、「答え」ではなく「問い」を見つけていくことに集中する必要があります。目の前のキャンパーが「本当に」必要としているもの、神様が彼（彼女）をこのキャンプに導かれた真の目的は何か。この段階では、キャンパーの言葉に耳を傾け、その人が自覚している問題（悩み）と、その背後にある（しばしば本人も自覚していない）真の問題が見えてくるまで、時間をかけて聞き出す努力が求められます。楽しく遊んでいる中でのほんの一言が重大なヒントを示してくれることもあります。

カウンセラーの役割、立ち位置

キャンパーとの信頼関係には、いろいろな要素が絡んできます。「距離感」を常に意識しておく必要があります。キャンパーと年代の近いスタッフには、安心して話せる、自分を理解してもらえんという安心感があります。この「安心して話せる先輩」の存在は、きわめて大事なものです。牧師やベテランのスタッフにはその種の「近さ」は期待できませんが、聖書の知識や人生経験が豊富、これまでにいろいろな人の悩みを聞いて対応してきた、という「答えを知っている人」としての信頼感があります。自分の問題点が明確に見えてきたキャンパーにとつては、心強い存在となり得るでしょう。

自分の立ち位置と利点を自覚した上で、足りない点を補う努力を重ねるならば、さらによい関係を築いていくことができます。「年の近い、感覚も近い先輩が、真剣に聖書を学んだ上で質問に答えてくれる」、「自分に遠い存在と思っていたオッサンが同じレベルで本気になって関わってくれる」、こういうホンキでキャンパーたちに向き合う姿勢こそ、本当の信頼感を生み出すのです。

次回は、それぞれの項目について具体的に考えていきます。

聖書 ヨハネ20・24・29 テーマ 信仰への招き

序論

(水川武志)

共に集う場（礼拝）に一緒にいなかったトマスは、生きておられる主の顕現に浴する機会を逃してしまいました。礼拝を欠席した結果に伴う失態です。（わたしたちは主にお目にかかった）と証しする同僚の言葉がわからない。霊的顕現ではなく、体の伴った復活体ということが理解できない。このトマスの叫びを、主イエスは聞いてくださったのです。トマスも集う場に、復活の主が再び顕現くださった。そして、み言葉を聞いて信じる信仰の神髄に、世のキリスト者を導いてくださったのです。

一、彼らと一緒にいなかったトマス

トマスがなぜ他の弟子たちと一緒にいなかったのか不明です。殉教の覚悟のできていた（11・16）トマスは、他の弟子たちがユダヤ人を恐れて家に閉じこもっていた時、一人町に出て、食料の確保か、町の様子を見るため外出していたのだと考える人もあります。ライルは「十分な理由もないのに神の民の集まりから離れることは、いつも賢明で

ない」と手厳しい見方のあることを紹介しています。確かに共に集う礼拝の場で、生きている主の臨在に触れる事は事実（マタイ18・20）です。トマスの痛みを繰り返さないようにしたいものです。

二、戸惑うトマス

「わたしたちは主にお目にかかった」と証しする弟子たちの言葉を信じられないトマスは、イエスを信じられなくなったのではありません。体の伴う復活ということが理解できないのです。それは、人が確認できる領域を超えた内容だからです。トマスのこの戸惑いは、現代の私たちの課題でもあります。墓が空で、遺体が見当たらない状況証拠や、「私たちはお目にかかった」という証言があつたとしても、体の伴う復活となると理解できないトマスの正直さに、軍配をあげたくなるのではないのでしょうか。「私は、その体に十字架の痕跡きずあとを確認しなければ、決して信じません」とのトマスの正直な訴えに、同感できるところがあります。トマスは、主の復活を肯定したために、確かな証拠を手にしたかったのではないのでしょうか。

三、トマスの求めに応えられる主

トマスは、彼をだましたり陥れたりする動機を全く持た

ない、親友10人の証言を信ずることを拒否しました。これはとても悲しいことです。

これは、私たちがどんなに意をつくしてイエスの神であることを証言しても、信仰に導けないむなしさを体験した時のことを思い出させます。このような時、「弟子は、トマスに証しをし、彼の不信仰を取り除きとう御座います。主はこの弟子と共に働いてトマスにご自身を現し給います」とバックストンは解説しています。

いつも自分の手と目で確認できない物を信じられない、トマスのような人は多いのです。重体の中風患者をイエスの所に連れて来た人たちの熱心さをご覧になられた主は、中風患者の罪を赦し、病を癒されました。10人の弟子たちは、かたくなに信じることを拒むトマスを、非難したり排斥したりしていません。1週間後の日曜日、彼らはトマスと共に家の内で集います。前週の礼拝の再現です。戸を開ざした家の中に主イエスが入って来られ、中に立ち、「(安かれ)とみ声をかけてくださいました。

私は受洗して一年目、新生の恵みを頂いたにもかかわらず、罪に勝てない自分に悩まされました。聖餐礼拝で、今日は聖餐を断ろうと決心して臨んだのです。「これは私た

ちのために裂かれた主イエス・キリストの御体です」との聖餐式文の言葉を耳にした時、十字架の主の臨在に包まれたのです。「こんな罪人の私のために、身代わりとなつて十字架におかかりくださった主イエス様、感謝します」と、パンとぶどう汁を押しいただきました。逆転の祝福でした。〈あなたの指をここに付けて、わたしの手を見なさい〉。トマスはイエスに答えて言いました、「わが主よ、わが神よ」。トマスはイエスの復活体に接して、ただ彼が甦り給うたという事実を信じただけではなく、もつと深く、イエスの神性に対する信仰を告白したのです。そしてこれは、この福音書の冒頭にある「言は神であつた」という宣言に相応するものです(高橋三郎)。

結論

トマスの信仰告白は、これ以降の信仰者、すなわち、すべてイエスの姿を見ず、イエスの弟子の言葉による宣教によつて、信じて救われる者たちの初めとなつたのです(1ペテロ1・8〜9)。「御使たちも、うかがい見たいと願っている事である」(12) この祝福に与つて(あずか)いる事を感謝しましょう。

研究資料

(中島啓二)

テキスト

24 デドモと呼ばれているトマス デドモはギリシャ語名、トマスはアラム語名で、いずれも「ふたご」の意。共観福音書では名前だけの登場だが、本書では他に2回その言動が記録されている(11・16、14・5)。そこから垣間見えるのは、忠誠心に富むが、悲観的な人物像である。イエスがこられたとき、彼らと一緒にいなかった トマスだけ不在であった理由は不明。悲嘆に暮れる時、仲間と慰め合うのを好む人もいれば、一人で過ごしたい人もいる。悲観的なトマスは後者であったのかもしれない。その時に仲間と一緒にでなかったことは決して責められることではないだろう。

25 その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ トマスがこのように言うのは、弟子仲間が彼を説得するべくイエスの肉体の様子について詳細に語ったからだろう。トマスは、彼らが何かを見たことを疑っているのではない。問題は何を見たかである。彼は、弟子仲間が幻影や

幽霊といった実体(肉体)のないものを見たと考えたのである。決して信じない 「疑い深いトマス」というレッテルを貼^はられるゆえんだが、程度の差はあれ、弟子仲間が女性たちの報告に対してとった態度と根本的には変わらない。トマスとて、その場にいれば信じていたはずなのである。

26 八日のうち ユダヤでは起点の日も含めて数えるので、7日後、すなわち次の日曜日である。

27 あなたの指をここにつけて…信じない者にならないで、信じる者にな리なさい 復活のイエスは、霊だけではなく、手で触れる肉体を持つ存在である(ちなみに教会が直面した初期の異端思想はキリストの肉体を否定する仮現説^{ドレテイズム}であった)。イエスはトマスが弟子仲間^{ドレテイズム}に言い放つたことをご存知であったので、見るだけでなく、手で触つて確かめよと招かれたのである。もちろんこれは単なる勧めではなく、信仰へのチャレンジである。

28 わが主よ、わが神よ 復活の主を見、またその声を聞いたとき、その体に触れるまでもなく、トマスの心の奥底からこの言葉があふれ出た。これは単なる呼びかけではなく信仰告白である。しかも抽象的な神学的定義ではなく、「わが」という人格的な告白である。イエスこそ神であり、

自分は僕としてその真の神に喜んでお仕えする、との決意表明なのである。意外にも、神という表現がイエスに用いられる場面は極めて少ない（1・1、テトス2・13、ヘブル1・8、1ヨハネ5・20）。そのうちの一つ、「言は神であつた」という本福音書の最初の宣言がこのトマスの信仰告白によつて確証づけられるのである。その意味で、この信仰告白は、本福音書の頂点と呼ぶことができる。一度は復活を疑つた者が、よみがえつた主に対する最高の信仰告白を言い表したのである。

29 あなたはわたしを見たので信じたのか イエスは必ずしもトマスを非難しているわけではない。他の弟子たちもみな、見るまでは信じなかつたのであり、彼らがトマスよりも1週間早く信じたのは、1週間早くイエスを見たからである。しかし重要な点はそこではない。見て信じることが、見ないで信じることよりも劣るわけではないし、反対に、見ることでできないのは不幸だというのでもない。重要なことは、トマスや他の使徒たちのように復活の主を見る特権にあずかる人たちもいるが、教会の歩みの中では、大多数がそうでない人たちだということである。そして、その後者も決して不幸ではなく、幸いなのだということである。

ある。見ないで信する者は、さいわいである よつて「人なたちは、さいわいである」で有名な八福の教え（マタイ5章）と同じ形式で、イエスはこのように語るのである。使徒たちの時代が過ぎ去れば、すべての信者は、見ないで信じなくてはならない。それがなぜ幸いなのかというところ、聞いて信じることができるからである。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ローマ10・17）。ヨハネはこのことを知っていたからこそ、「キリストの言葉」、すなわちキリストの物語を、福音書に著したのである。その目的は読む者が信仰に至るために他ならない（31）。トマスは最初の日曜日に不在であつたことで、実質的に、よみがえりのイエスを見ることのできない後世のクリスチャンたちと同じ位置にあつたのである。この福音書を読んだ最初の読者たちは、イエスを見なかつたが、信じた。同様に、現代の読者たちもまた、イエスを見ないが、信じることはできるはずなのである。

参考文献 注解書 G. R. Beasley-Murray (WBC), F. F. Bruce (Eerdmans), B. Lindars (New Century Bible), その他 IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書

ヨハネ20・24～29

タイトル

信じる者になろう！(進級式)

暗唱聖句

信じない者にならないで、信じる者になりなさい。

ヨハネ20・27

目標

キリストの導きの中で目に見えないキリストを信じる者となる。

導入

(松浦みち子)

みなさん、進級おめでとう！ピカピカの小学一年生、中学一年生にとってはどんな学校生活が待っているか楽しみです。みなさんの健康が祝され、神様の守りの中に日々が恵まれますようにと祈ります。教会学校では、聖書を通してとても大切なことを学びます。天国の門に続く、永遠の命についての学びです。お友達をさそって、さあ教会学校へ、レッツゴー！

イエス様にお会いしなかったトマス

十字架にかかって三日目によりみがえらされたイエス様は、弟子たちによりみがえりのお姿をあらわされました。それはちょうど弟子たちがイエス様の亡くなられた後、「今度は、自分たちが捕まえられて、殺されるかもしれないな」、「ど

うしよう」とガタガタ震えながら、戸を閉め鍵をかけた部屋で縮こまつている時でした。イエス様はスツと部屋に入つてこれられ、「平安があるように」と言われ、十字架の釘跡のある手と脇とを見せられました。弟子たちはイエス様を見て大喜びしました。ところがその時運悪く、12弟子の一人トマスはその場に居合わせませんでした。しばらくして、外から帰つて来ると、他の弟子たちが口々に大喜びして「私たちは主にお会いしたよ」と言っています。「えっ！うそだろう!？」と全然信じる事ができません。「おいおい、お前たち、気が変になったのかい。死んだ人が生きかえるなんて、そんなバカな話があるか。私は手に釘跡を見、私の指をその釘跡に差し入れ、私の手をそのわき腹にさし入れてみなければ、絶対に信じないぞ!」と言いはりました。

トマスに会われるイエス様

それから一週間たちました。その日も弟子たちは戸を閉め、部屋の中にいました。今度はトマスもいます。イエス様は鍵のかかった部屋の中にスツと姿を現され、「平安があるように」とおっしゃいました。それからトマスのほうを向いて、「トマス、あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしの脇にさし入れて見

なさい」と、うながされました。トマスは触らなくてもよく分かりました。すぐ床にひれ伏し、「わが主よ、わが神よ！」と答えたのです。すると、イエス様は、「トマス、あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」とおっしゃいました。

見ないで信じる者

イエス様は、トマスを責めておられるではありません。「トマス、信じていない者にならないで、信じる者にならない」と、見ないでも信じることの大切さを教えてくださったのです。イエス様のよみがえりは「えっ！うっそ!?」とだれでもが思うような事柄ですが、本当のことなのです。

今、私たちは目でイエス様を見ることはできません。どうしたら、今も生きておられるイエス様を信じることができるのでしょうか。それはみ言葉による以外にありません。聖書には、復活の主に出会った人々の真実な証が書かれています。また、復活の主に出会って人生が変えられた多くの人々の信仰の足跡が残されています。それらを通して、心からイエス様を信じることができるのです。「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につ

くせない、輝きにみちた喜びにあふれている」（イペテロ1・8）と聖書に書かれています。イエス様は、トマスとのやり取りを通して、後に生きる私たちのために、「見ないで信じる者は、さいわいである」と言ってくださいたのですね。

私たちの歩みのなかでも、見ないで信じるさいわいが多くあります。ひまわりの種を植えたとしましよう。やがて、夏になると背丈も伸び、大きなひまわりの花を咲かせることを信じますね。反対に、こんな種からあの大きなひまわりが咲くはずがないと思いますか。

聖書に書かれていることは本当です。目に見えない神様が、聖書を通して語ってくださいているのです。66巻の旧約聖書、新約聖書には、イエス様が神の独り子としてこの世に来てくださり、十字架にかかって救いの道を開いてくださったこと、信じる者に永遠の命が約束されていることが書かれています。「えっ！うっそ!?」と言わないで、信じる者になってください。そうすれば、あなたの毎日は神様の愛と恵みに満ち、喜びでいっぱいになるでしょう。

♪主イエスとともに♪

（こどもさんびか118）

聖書 ヨハネ21：1～14 テーマ 世明けに立つキリスト

序論

(高橋頼男)

キリストの復活の記事は、どれも希望と喜びにあふれています。絶望の中に閉じ込められていた人、迷いと不安の中にあった者、弱き無力さに打ちひしがれていた人々が、希望と喜びと力に溢れ、豊かな慰めをいただいているのです。弱い者が強くされ、恐れていた者が勇氣と確信をもって立ち上がっていくのです。キリストの復活の力は絶大です。しかし、弟子たちの中に復活の主がはつきりとするためには、なお少しの時間が必要だったのです。甦^{よみがえ}られたキリストは、弟子たちをもう一度一つにまとめ、行き届いた配慮をもって導かれます。

一、不安定な弟子たち(1～3)

これはガリラヤ湖畔で弟子たちへの三度目の顕現です。すでに弟子たちは復活の主にお目にかかっていました。しかし、弟子たちの心はまだはつきり定まっていなかったのです。この時、弟子たちの中に主はおられません。主がおられない群れは大変危ういものでした。

弟子たちは漁に出ました。この出漁を言い出したのはペテロです。この時、漁にすることはなほ危険なことでした。つい数日前、復活の主を見てあれほど喜び、新しい任命を受けていたにもかかわらずこのような行動に出たのは、明らかに彼らの心の動揺を示すものでした。もしこの時、かなりの漁獲があったならば、彼らはまた昔の漁師に戻っていたかもしれません。一度捨てた網をもう一度取り、人間を捕る漁師から魚を取る漁師に逆戻りする危険性がありました。しかし、幸いにも(その夜はなんの獲物もなかった)のです。これは神の憐^{あは}れみでした。信仰第一で熱心であった者が、生活の心配のためにもこの仕事に帰りそれが成功した時、世の仕事にずるずるとのめり込んで教会から離れ信仰を失ってしまうことさえあるのです。しかし、そんな危機の中、復活のキリストは彼らの中に介入され、朝の岸边に立つて彼らを迎えてくださいます。

二、主のご介入(4～8)

その朝、ガリラヤの浜辺に立たれた復活の主は、再び弟子たちに声をかけられました。(「子たちよ、何か食べるものがあるか」主が共におられない肉的努力の空しさを言い当てておられます。そして、(舟の右の方に網をおろして見なさい。そうす

れば、何かとれるだろう」と呼びかけられました。彼らが言われたとおり網を下してみると大漁だったのです。まさにこの時、弟子たちの霊的危機の中に復活の主のご介入があったのです。

このありさまを目の当たりにし「あれは主だ」とヨハネが言いました。彼らにはこのような経験（ルカ5・1～11）をしたことがありませんでした。かつて弟子たちは一晩中漁をしましたが何も取れませんでした。がっかりして空しい心で網を洗っていた時、イエスがペテロの舟に乗り込まれ、集まった人々に言葉をお話し、網をおろして漁をしてみなさい」と言われ、躊躇（ちゅうちう）しましたが結局その通りにすると驚くべき大漁でした。この事を通してペテロと弟子たちは主イエスの中に神を見、自分たちの罪深さを知りました。この朝の出来事はこの経験の再現でした。み言葉に聞き従ったとき、そこに大漁という祝福を見ることができたのです。

〈あれは主だ〉と言われてはとしたペテロは、瞬間、再び内的覚醒を得ることができたのです。

裸であったペテロは上着をまとい湖に飛び込みました。そして、主のもとに帰ったのです。

私たちも主との交わりを持たず心の定まらないまま生活し、

自分の力で何とか頑張つてやっついていこうとし、無意識のうちに主をのけ者にしていないでしょうか。心と生活の中から主を締め出して自分と自分の力に頼る生活を行い、その結果、何とも思うようにいかず失意と空（わな）しさを感じてはいませんか。

三、朝の食卓（9～13）

陸に上がるとすでにそこには主によって朝食の準備がなされていました。不漁は神を抜きにした肉的努力の象徴でした。しかし、弟子たちはこの暗い空しい経験から、主の助けによって新しい復活の主の臨在と祝福に導かれました。

もうだれも、あなたはどなたですかとは尋ねません。わかっていたからです。彼らは主の親しい臨在の中で朝食に与って満ち足りました。なんと豊かな幸いな養い、交わりでしょう。もう決して主から離れることがあつてはなりません。

結論

私たちの傲慢や肉のゆえにいつの間にか主から離れ復活信仰を失つて、空しくいのちのない生活に流れてしまう時、主は私たちの危機に介入し、私たちをもう一度ご臨在の中に導いてくださいます。今、主を仰ぎ、主のもとに立ち返りましょう。

研究資料

(中島啓二)

20章がこの福音書全体を総括するような形で終わっていることから、21章を後代の別の著者による付加と考える者もいる。しかし21章なしで当福音書が流布された事実を示す証拠はなく、結論が語られた後もまだ続くというスタイルは、当時の他の書物にも見られるものである。この章は前章までと同じ著者(ヨハネ)の手による、なくてはならない重要なエピソード部分と言えるだろう。

テキストト

1 そののち 新しい区分に移るときにヨハネがよく用いる表現で、必ずしも前章の出来事の直後ということではない。弟子たちの多くが故郷ガリラヤに帰っていることから、エルサレムでの顕現からある程度の時間が経過しているであろう。テベリヤの海へ ガリラヤ湖のこと。弟子たちは決して故郷に逃げ帰っていたのではない。復活の主は、女性たちを通して彼らにガリラヤに行くように命じておられたのである(マルコ16・7他)。

2 ゼベダイの子ら ヤコブとヨハネのこと。ここには7人の弟子たちがいたと記されている。

3 わたしは漁に行くのだ 主に従うことを放棄して、漁師に戻る決心をしたという解釈もあるが、そこまで厳しく読むべきではないだろう。とはいえ、イエス不在の働きは空しいものである。その夜はなんの獲物もなかった 夜は漁に適した時間であるが、イエスの不在を暗示する表現でもある。主に信頼しない働きは実を結ばない(15・5)。

4 イエスが岸に立っておられた… マリヤの場合と同様、弟子たちもそれがイエスだとは気づかなかった(20・14)。まだ暗かったこともあるが、霊的鈍感を否定することはできないだろう。

5 何か食べるものがあるか [ギ]プロスファギオンは、パンと一緒に食べる「おかず」の意味で、多くの場合「調理した」魚」を指す。弟子たちも「魚(ただし調理前)」の意味で返答した。

6 舟の右の方に網をおろして見なさい… 網は亜麻や麻で編んだロープから作られており、広がった先に重りがつけられ、水底に沈むようになっていた。彼らは網をおろすとそれが主であることにはまだ気づいていなかったが、み声に対する即座の応答がみわざのあらわれへとつながった。魚が多くとれたので、それを引き上げることができな

かった この大漁の出来事はルカ5・1～11の出来事を思い出させたであろう。なお前回は「網が破れそうになった」(ルカ5・6)が、今回はそうではない。弟子たちの宣教を通して多くの回心者がおこつても、救いの網は破れないということ象徴しているという興味深い解釈もある。

7～8 イエスの愛しておられた弟子 諸説あるが、ゼベダイの子ヨハネと考えるのが最もふさわしいだろう。あれは主だ ヨハネは、墓の場面でも、布と亜麻布から、イエスが死人の中から復活されたことを悟った(20・4～8)。裸になつていたため、上着をまといて海にとびこんだ裸と言つても素裸ではなく、上着を脱いでいる状態を指す表現で、肌着が少なくとも腰巻きはつけていたと考えられる。海に飛び込んだのは、イエスのもとにすぐに行きたいという思いからであろう。

9～10 炭火がおこしてあって、その上に魚がのせてあり、またそこにパンがあつた 魚(ギ)オプサリオン)は(ギ)プロスファギオン(5)と同様、「おかず」の意味で、多くの場合干し魚や焼き魚を指す。単数であることは、魚が一匹か少数であつたことを示す。今とつた魚を少し持つてきなさい ご自身が用意した魚に、弟子たちが獲得に参与した

魚を加えたことは、弟子たちと教会を宣教の働きにお用いになることを示すという解釈もある。

11 百五十三びきの大きな魚 この数字に何らかの意味を見出そうとする解釈もある(たとえば当時知られていた魚の種類が全部で153種であつたとし、そこから福音宣教の普遍性を示そうとする解釈など)。しかし、弟子たちには食べきれないほどの魚が獲れたことを目撃者の証言に基づいて正確に記録しているのが妥当であろう。

12～13 さあ、朝の食事をしなさい 主は彼らのために用意された食事へと招いてくださった。パンと魚は大地と海との収穫を象徴するものでもある。かつて5つのパンと2匹の魚から五千人を超える大群衆を養われた主は、これからも弟子たちと教会とを養い、導いてくださるのである。パンをとり彼らに与え、また魚も同じようにされた 聖餐を思い出させる光景である。初代教会では魚はキリストを指し示す重要なシンボルであつた。食卓を囲むことは主との豊かな交わりの象徴であり、その命にあずかることを意味する。教会とキリスト者は主との交わりから養いと命を受け、魂を獲得する宣教へと遣わされていくのである。

参考文献 4月7日分に同じ。

聖書

ヨハネ21・1～14

タイトル

ガリラヤ湖畔での再会

暗唱聖句

夜が明けたころ、イエスが岸に立っておられた。
ヨハネ21・4

目標

失意を喜びに変えようとして待っていてくださるキリストを見上げる。

導入

(松浦みち子)

みなさんは悲しい出来事に会ったたり、つらい経験をした時、気分が落ち込んで、「あーあ、わたしってダメなんだなあ」「どうしたらいいのだろう」と、思ってしまうことありませんか？

そんな時、誰かがそつと「お茶、しない？」と声をかけてくださって美味しいケーキやお菓子のおもてなしを受けたら、少しだけ気持ち明るくなるかもしれませんね。

今日は、がっかりした弟子達がイエス様のおもてなしを受け、力づけられたお話しですよ。さて、イエス様のおもてなしは何でしょう？

弟子達、約束を思い出す

イエス様の弟子たちは復活のイエス様にお目にかかり、

喜びに満ち溢れましたね。安心しました。でも、よみがえられたイエス様は今までのようにずつと一緒にいてくださるわけではありません。スツと姿を現され、一緒にお話しをしていたのに、アレツと気がつくともうお姿が見えなくなってしまうのです。弟子たちはこれからどうやってイエス様にお仕えしていったらよいのか、何をしたらよいのかわからずにいました。そんな時です。「あつ、そうだった！」イエス様との最後の晩餐を思い出しました。「わたしは、よみがえつてから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう」イエス様の約束を思い出したのです。「さあ、ガリラヤへ行こう！」弟子たちはエルサレムの戸の閉まつた家から飛び出して行きました。

ガリラヤ湖で漁をする

ガリラヤ湖についた弟子たちはペテロ、トマス、ナタナエル、ヤコブ、ヨハネともう二人の七人でした。弟子たちは道々、イエス様のよみがえられた日の朝、墓の前で告げられたという御使いからの言葉も思い出していたことでしょう。「驚くことはありません。十字架につけられたイエス様を捜しているのです。ごらんなさい。あの方はここにはおられません。前もって言われたとおり、イエス様は

あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。そこでお会いできます」と。

息をはずませてガリラヤ湖畔につきましたがどこを捜してもイエス様は見当たりません。元漁師だったペテロが「おれは、漁に行く!」と言い出しました。すると、みんなも「それじゃあ、おれたちも」というわけで、そろって小舟に乗り込み漁に出かけました。もともとプロの漁師たちだった彼らですが、いったいどうしたことでしょう。一晚中網を投げて漁をしても魚は一匹もとれません。こんなはずはない、という思い出す限りの方法で知恵をしぼって網を投げるのですが、全然ダメです。みんな失望落胆し、へとへとです。もう夜が明け始めました。すると、岸边に誰かが立っているのが見えたが、ぼんやりかすんでいるので誰かはわかりません。「おーい、魚は獲れたかー」と岸边の人が声をかけてきました。「いやー、全然ダメだー」と答えると「じゃーね、舟の右の方に網をおろしてごらん。きつと魚が獲れるよー」さっそくその通りに網をおろすと、どうでしょう。さっきまでいなかった魚がピチピチと音をたてて網に入ってくるではありませんか。ウワァー、重くて引き上げられません。ヨハネが岸边のほうを向いて「あつ、

あれは主だ!」と言ったので、ペテロは上着を身に着けザブーンと湖に飛び込み岸に向って泳ぎだしました。

イエス様のおもてなし

弟子たちが岸についた時、イエス様は朝ごはんを用意して待っていてくださったのです。炭火をおこし魚を焼き、パンもありました。「さあ、今、獲れた魚も少しここに持つてきなさい。」獲れた魚を数えると一五三匹もの大きな魚が網にかかっていました。「さあ、疲れただろう。パンを食べなさい。魚もどうぞ」とやさしくもてなしてくださるイエス様にお会いし、弟子たちは身も心も満たされ、今までの苦労も不安もふっとんでしまいました。お約束のとおり弟子たちはイエス様にお会いできてほんとによかったですね。

イエス様はいつでもわたしたちの弱さや欠けをご存知です。がっかりすること、どんなにがんばってもできないことがあることもね。でも、やさしくおもてなしの心をもつてわたしたちを覆い包んでくださり、人の思いを超えて素晴らしいことをなしてくださるのです。信じて進みましょう。

♪主に従うことは♪

(讃美歌 21 507)

聖書 ヨハネ21・15〜23

テーマ わたしを愛するか

序論

(水川武志)

ガリラヤ湖畔には、主が弟子たちと食事をした岩（主の食卓）を包み込むようにして、聖ペテロの召命教会が建っています。教会のすぐ前には、半円形の野外ステージがあります。私はかつて、ここでイエスがペテロに「あなたは、わたしを愛するか」と語りかけた事を思い、しばし祈りの時を持ちました。「たといあなたと一緒に死なねばならなくなっても、あなたを知らないなどとは決して申しません」（マタイ26・35）と誓ったペテロの失態を、私たちも知っています。甦りの主は、他の弟子たちの前で、ペテロの再召命の時を用意されたのです。

一、イエスは、シモン・ペテロに言われた

主は食事を済ませ、くつろぐ弟子たちの前で、ペテロに語りかけられました。（あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか）。新改訳聖書の欄外には、イエスが「愛」（アガパオー）で語りかけ、ペテロは（フィレオー）で答えたと解説されています。アガパオー

（神的愛）とフィレオー（人情・友愛）だと説明されてきました。十字架前のペテロは、どの弟子よりも強い愛をもつて、主を愛していると確信していました。最後の晩餐で「今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と予告されたとおり、ペテロは、主を裏切つてしまいました。自責の念に苦しむペテロに、再起の機会を与えようと、主はご配慮くださったのです。「ペテロ、お前はわたしをアガパオーで愛しておりますか？」「主よ、私がフィレオーで愛していることは、あなたがご存知です」。同じ言葉で二度繰り返され、三度目には、「ペテロ、お前はわたしをフィレオーで愛するか。」「そうです。私が主をフィレオーで愛しているのは、おわかりです」。ここで二つの言葉に大きな意味の差はなかったという学者も大勢あります。しかし、ペテロが、三度も繰り返し尋ねられても怒らず、（心をいため）たのは、真実の悔い改めの証拠（バックストン）です。（主よ、あなたはすべてをご存じです）、ペテロは主の御前にすべてを打ち明け、すべてを明け渡したのです。主が求められたのは、この全権委譲です。ペテロは自分のことは、自分よりも主の方がよく知っておられる事を、

悟ることができました。

二、わたしの羊を養いなさい

甦りの主は、真の悔い改めに導かれた者に「わたしの羊を養いなさい」と任職の油を注がれたのです。「羊」は、主にとって最も価値あるものです。「わたしは羊のために命を捨てる」(10・15)。今、ペテロの手に、この尊い羊を委ねるということです。罪深さと弱さを自覚する者に対して、復活の主は、ここまで信頼を置いてくださるのです。「神はキリストによって、わたしたちを自分に和解させ、かつ和解の務をわたしたちに授けて下さった。すなわち、神はキリストにおいて世を自分に和解させ、その罪過の責任をこれに負わせることをしないで、わたしたちに和解の福音をゆだねられたのである」(II コリント5・18・19)。ペテロをこのように信任されるお方は、あなたをも教会学校教師として、信任してください。ペテロのように、高慢な心を捨て去り、全権を主に明け渡して、主に仕えることが大切です。主が命がけで愛されている、子どもたち一人一人の魂を、私たちは愛をもって養って参りましょう。

どのように子どもを愛したらよいのか、戸惑いを覚え

ている教師もおられるかも知れません。『実を結ぶ教会学校』金井由信著(ベラカ出版)の第三章『CS教師の心得』を読む事を勧めます。勿論、「愛は、神から出たもの」(Iヨハネ4・7)ですから、神に祈ることは言うまでもありません。

あるCS教師は、話すのが大の苦手で、1週間良く準備して来られるのに、分級で話し出すと5分で終わってしまうのです。努力を重ねても5分話すと、もう種が切れてしまうのです。ところが彼の祈りには力があり、生徒が次々に増えていくのです。生徒のために涙を流して祈る祈りは、生徒の魂に共鳴して、魂を生かしていくのです。この教師は、ペテロがこの時に体験した恵みを、自分のものとする事ができたのだと思います。

結論

張り切ってCS教師を励む中で、やめていく生徒が現れる時、打ちのめされる経験をいたします。主は、失望するペテロに再召命の言葉をかけられたと同じく、「わたしの羊を養いなさい」と呼びかけています。全権委譲して、主を愛し、生徒を全力で愛して、立ち上がり励みましょう。

研究資料

(中島啓二)

他の弟子たちもいた前節までと大きく雰囲気が変わり、ここではペテロだけに焦点が当てられる。「(愛) 弟子がついて来るのを見た」(20)とあることから、おそらくイエスがペテロを食後の散歩に誘ったのであろう。そんな一対一の状況で、イエスはペテロの魂を取り扱われた。それは、主との関わりを3度も否定したことで失意のどん底にあつたペテロのために、イエスが用意された、なくてはならない回復のプロセスだったのである。

テキスト

15~17 あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか ここでイエスは、他の弟子たちのそれと比べてのペテロの愛の深さを問うているのではない。むしろそれを比較し、誇っていたのはかつてのペテロであり(マタイ26・33)、その自信は「あなたのためには、命も捨てます」(13・37)と豪語するほどであった。イエスはそんなペテロに、今でもそのように言えるか否かを問われるのである。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです しかし、現実に主を否んでしまったペ

テロには、かつてのような宣言をすることは到底できなかった。けれども、彼のイエスを愛するという思いが偽りでないことも、また真実であつた。そんなペテロの思いをイエスは、彼のうちから引き出してくださつたのである。

ちなみにこのやり取りの中で、[ギ]アガバオー(神の愛に代表される無条件の愛を表すことが多い)と[ギ]フィオー(友愛を表すことが多い)の2種類の動詞が「愛する」の用語として用いられている。イエスは最初の2回を[ギ]アガバオーで「愛するか」と尋ね、それらに対しペテロは[ギ]フィオーで答えた。そして3度目にイエスは[ギ]フィオーで尋ね、ペテロが[ギ]フィオーで答えたのである。今日、これらの用語の違いを重要視しない解釈が主流である。その根拠は、少なくともヨハネ文書においては、両者が各所で相互可換的に用いられていること、そしてヨハネが類義語を同義で用い、多彩な表現をすることを好むからである。しかし「愛する」の用語の違いに着目する伝統的な解釈や説教もあつてよいし、今日もこの立場に立つ有力な神学者もいる。ただし、より確実に言えることは、イエスが愛について、ペテロに3度繰

り返し問われたということである。それは、彼の3度の失敗に呼応するものであるが、決して懲らしめることが目的ではない。むしろ、それはペテロから愛の応答を3度導き出すものであつて、その目的は彼が立ち直るために他ならない。このように繰り返し問い続けるイエスの姿こそ、ペテロの存在の奥底まで彼を捜し求める、良き羊飼としてのイエスの姿なのである。**わたしの小羊を養いなさい** その大牧者なるイエスが、ペテロを小牧者に任命される。イエスは、ご自身に従う牧者を通してその宣教の働きを進められるのである。なお「わたしの羊を飼いなさい」(16)、「わたしの羊を養いなさい」(17)は、表現は多少異なるが、内容は同じと考えてよい(前述のヨハネの表現の特色による)。後にペテロは同じ表現を用いて、「あなたがたにゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい」(1ペテロ5・2)と長老たちに勧めている。**心をいためて** 「あなたが立ち直ったときには、兄弟たちを力づけてやりなさい」(ルカ22・32)。自らの失敗を直視し、打ちのめされる経験と、そこから一方的な主の恵みによつて回復される経験は、ペテロが教会を牧会していく上で、不可欠なものであつた。

18〜23 自分の手をのばす 十字架刑を指す一般的な表現だが、ここでは十字架を刑場に運ぶために背負うことを指すという解釈もある(順番的にはこの方が理にかなっている)。ほかの**人があなたに帯を結びつけ、行きたくない所へ連れて行く** これは執行人による刑場への連行を指すのだろう。**どんな死に方で、神の栄光をあらわすか** ここに、はつきりとペテロの殉教が予告されている。しかしそれは悲劇ではなく、神の栄光があらわされることなのである。神はイエスの死を通してご自身の栄光をあらわされた(17・1)。同様に神は、イエスの名のために苦しみを受ける者を通して、栄光をあらわされるのである(1ペテロ4・16)。**わたしに従ってきなさい** イエスが「わたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになつてから、ついて来ることになるう」(13・36)と予告されたことが、この命令によつて成就した。さらには「あなたのためには、命も捨てます」(13・37)とのペテロの宣言が、遅ればせながらも、ついに果たされるのである(実際この福音書が著された時期には、ペテロは既に殉教の死を遂げていた)。

参考文献 4月7日分に同じ。

聖書

ヨハネ21・15～23

タイトル

イエス様との出会いと召命

暗唱聖句

わたしを愛するか… わたしの小羊を

養いなさい

ヨハネ21・15

目標

キリストの愛の招きに応え、キリストを愛し、仕える者となる。

導入

(松浦みち子)

あなたは取り返しのつかない大失敗をしたことがありますか？そんな時、がっくりと気落ちして、食事をすることも、人に会うことも嫌になつて落ち込んでしまうでしょう。

こんな出来事がありました。みんなでクラス旗を作ることになりました。デザインを考える人、色を塗る人など、みんなで手分けして作業をします。完成間近のことでした。一人の不注意で絵の具がこぼれ、せっかくのクラス旗が台無しになってしまいました。みんなの顔は青ざめました。締め切りは明日だったのです。失敗した子は小さくなつて「ごめん、ごめん」というばかり。クラスのみんなは、あと少しというところだったので、カンカンに怒っています。その時です。一人の子が言いました。「初めのデザインとは違うけど、汚

れた所をこんな風に変えようよ。大丈夫だよ！」と言いました。「そうしよう」、皆が賛成しました。赦しの言葉を聞いた子はどんなにほつとしたことでしょう。胸がキュンとうれしくなりました。

あなたはわたしを愛しますか

ガリラヤ湖畔でイエス様との一緒にの食事が終わった時、イエス様がペテロを呼んでおっしゃいました。「ペテロ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。即座に「はい、イエス様。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」と答えました。ペテロは以前「イエス様と一緒になら死んでも恐くない」とみんなの前で言い切ったことがありました。ところが実際にイエス様が捕まえられると、恐くなつて逃げてしまいました。それだけではありません。イエス様のことを三度も「そんな人は知らない」と言ってしまったのです。一度口から出てしまった言葉は、取り消すことができますね。「覆水盆に返らず」です。ペテロはどんなに後悔したことでしょう。復活されたイエス様と食事をしながらも、そのことが頭から離れなかつたにちがいありません。そんなペテロの心の内をご存じのイエス様は、ペテロに目を留め、「わたしを愛するか」と優しく問いかけられたのです。

そしてペテロに「わたしの小羊を養いなさい」とおっしゃいました。またもう一度ペテロのほうを向いて「わたしを愛するか」とおっしゃったので、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」と言いました。

三度目に「わたしを愛するか」と言われたので、ペテロは心を痛めて、「イエス様、あなたは私がしたことも、私の心も全部ご存じです。私がイエス様を愛していることは、イエス様、あなたがご存じです」と一生懸命答えました。イエス様はペテロがイエス様を愛していることをよくご存じでした。ペテロに三度「愛しています」と言わせることを通して、ペテロを赦していることを教え、励まそうとなさったのです。なんと優しいイエス様でしょう。胸がキュンとなりますね。そればかりでなく、「わたしの小羊を養いなさい」と新たな使命に生きる道をお示しになりました。

わたしに従いなさい

「ペテロ、よく覚えておきなさい。あなたは若いときは自由に歩きまわっていました。でも年を取ってからは、他の人があなたを引っばって、自分が行きたくない所に連れて行かれるでしょう」。イエス様は、ペテロがこれから、どのように新しい仕事に取り組んでいくか、苦しい目にあうか、どの

ような最期を遂げるかをご存じだったのです。そのペテロに向かって、イエス様は「わたしに従ってきなさい」と、おっしゃいました。もちろん、それからのペテロは、どんなに苦しくても逃げ出さないうで、喜んで従いました。ペテロの胸は、失敗を赦してくださったイエス様の愛を思い出すたびに、キュンと熱くなったのです。そして、どんな困難も乗り越える力を与えられたのです。言い伝えによると、ペテロは、最期の時、イエス様と同じ十字架刑にあつたといわれています。しかも、「イエス様と一緒にでは申し訳ない」と、逆さに十字架につけられ、殉教の死を遂げたといわれています。ペテロはどんなに深くイエス様を愛していたことでしょう。

あなたは失敗した時、自分の弱さに悩む時、どうしますか？ 私たちは間違いを犯すことがあります。失敗を失敗で終わらせないイエス様に、信頼しましょう。イエス様の十字架を仰ぎ、イエス様を信じて歩んでいきましょう。イエス様から「わたしを愛するか」と聞かれたら、「イエス様あなたを心から愛しています」、「私はあなたに従って行きます」と、お応えできる者となりましょう。

♪主よ終わりで♪

(讃美歌21・510 1節)

聖書 テーマ マタイ28・16〜20 キリストと共に遣わされる

序論

(大頭真一)

復活されたイエスは、天に昇られる前、弟子たちにお言葉を残していかれた。それは、イエスを信じる私たちにも与えられているお言葉である。

一、信仰への招き

復活のイエスを「疑う者もいた」。しかし、イエスは疑う者も含めて「彼らに近づいてきて」くださったことに目をとめたい。私たちは信仰の弱さを覚えるとき、主を遠く感じる。けれども、そのときこそ主は最も近づいてくださるのだ。復活の主を疑った代表格はトマス。主はトマスに近づいて、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」(ヨハネ20・27)とおっしゃってくださったことを思い出そう。

二、宣教の命令

「天においても地においても、いっさいの権威を授けられた」主イエスは「それゆえに」宣教を命令される。その権威は神の子としての権威であるだけでなく、十字架と復活を通られたことによつて父から与えられた二重の権威である。この権威が及ばないところはどこにもない。私たちの宣教は主の権威の及ばないところで行われるのではない。それがたとえ地の果てであっても、また日本のような偶像の国であっても、主の権威の下にある場所であることを覚えたい。

大宣教命令の内容である「弟子とし」、「父と子と聖霊との名によつて、彼らにバプテスマを施し」、「命じておいたいっさいのことを守るように教えよ」はいずれも、宣教の目的が一回かぎりの決心ではなく、生涯を通していよいよ神との交わりに進むキリスト者を誕生させることにあることを示す。特に「父と子と聖霊との名」というときの名は単数であり、神の三位一体性を示している(新改訳聖書欄外註)。三位一体の神は、愛の交わりのうちに一つの神である。そのありさまは「キペリコレーシス、すなわち相互内在・相互浸透と表現されてきた。(マク

グラス「キリスト教神学入門」445頁。バプテスマによってキリスト者は、ご自身交わりの神である三位の神との交わりへと招かれる。そして、その交わりのうちにキリスト者は宣教に遣わされるのである。このことをヨハネ17章は余すところなく描く。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。すなわち、彼らをもわたしたちのうちにおらせるためであり、それによつて、あなたがわたしをおつかわしになったことを、世が信じるようになるためであります」（21節）とあるように。

三、臨在の約束

昇天後も、主イエスは（いつもあなたがたと共にいる）と約束された。遍在（へんざい）（どこにでも存在すること）は神の性質である。インマヌエルの神である主が私たちとともにいてくださるのだ。

けれども、ここでの臨在の約束は、信仰者ひとり一人に与えられている約束であると同時に、特に宣教する教会に向けられている約束であることに注意したい。キリ

ストは「そのからだなる教会のかしらである」（コロサイ1・18）。主は教会と一体でいてくださる。教会の喜びや苦しみは、主の喜びや苦しみである。かつて「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか」とおっしゃった主は今も教会と喜びや苦しみをもにしていってください。現実の教会がいかに問題だらけであるかは言うを待たない。教会の歴史がそれを語っている。何よりも私たち自身はなほ、だ不完全で恥じ入るようなお互いである。けれども、そんな教会と共に宣教することを、主はお選びくださった。そして時に教会が誤り、私たちがつまずきとなるときにも、主は私たちと共にとどまってください。そして、私たちを励まし、懲らし、悔い改めに導いてくださる。そして、何度でももう一度立ち上がらせてくださるのである。

結論

宣教は主の命令である。主はこの光榮あるわざをご自身の権威をもって可能とし、ご自身が共にいてくださることによって続行させてくださる。インマヌエルの主の招きに応じて、日々主を証しする者であり続けよう。

研究資料

(宮澤清志)

先週まで、ヨハネによる福音書を通して復活後の主イエスのお姿を見てきた。今日のテキストは「キリストの復活」の単元の最後としてこの箇所が選ばれている。同時に使徒の働きへの序章としての役割も併せ持つ。使徒たちが何を根拠として遣わされたのかを明確に語りたい。

テキスト

16 十一人の弟子たち ユダの死を計算に入れた数字(マタイ27・5)。ガリラヤ 復活の主イエスがガリラヤで弟子たちにお会いになった記事は、この箇所とヨハネ21章に述べられている。イエスが彼らに行くように命じられた山 具体的な「山」の記述は出てこない。しかし、マタイにおいては、山は神的顕現の象徴として、また日常の世界から離れた啓示の場、ないしは救いの場として描かれている(マタイ4・8、5・1、15・29、17・1)。それゆえ、この「山」がどこの山かと問うことはここではあまり意味がない。

17 拝した 礼拝した(新改訳)。疑う者もいた この言葉は注目に値する。実は、この「疑う者」が誰なのか

で、この箇所の語り方も変わってくる。例えば16節の「十一人の弟子たちは」を主語として、この場面には復活の主と十一人の弟子がいたとすると、疑ったのは礼拝している十一人の弟子たちということになる。しかし、「ある者は疑った」(新改訳)と取った場合、この場所には十一人の弟子たちの他にも人々がいたことも推測され、パウロが「五百人以上の兄弟たちに、同時に現れた」(1コリント15・6)という場面をここに見ることもできる。同時に「疑った」人々とは、この「兄弟たち」ということも可能性を残す。いずれにしても、復活者の顕現によつて、信仰に導かれる者となお疑う者とに分極化したという見方である。また、マタイが「疑った」という言葉を用いるに際して、「礼拝」と結びつけている(この箇所と14・31)ことから考えると、礼拝しつつも疑ってしまう弱い人間性を指摘しているとも言える。

18 権威

イエスへの権威の与え主は父なる神である。

イエスは荒野の試みにおいて、サタンからの試みを決然と拒否し、「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」(マタイ4・8、10)と、ただ神にのみ仕える道を進んで行かれた。ここ

において、イエスは十字架への道を決然と進んで行かれたのである。しかし、この十字架と、それに続く復活を通ってこそ、天上・天下一切の権威がその手に託されたのである。

19〜20 イエスは、この「神の子」としての権威により、大宣教命令を出されるのである。その命令は「行つて、すべての国民を弟子とする」ことである。この箇所ですべての**国民**とあるが、特筆すべきはマタイがイエスの復活において世界的伝道の視点を持ったと言ふことである。復活前のイエスの時代には、福音はイスラエルに限定して語られていた（参考 10・5〜6、15・24）が、イスラエルが福音を拒否した結果、福音は異邦人に対しても語られる時代に突入した。イエスの復活によって新しい時代の幕が開いたと言える。

また、その弟子たちに命じられることは、「父と子と聖霊との名によって、人々にバプテスマを施すこと」であり、また「命じられたいっさいのことを守るように教えること」であった。前者について言えば、三位一体の神との結合という意味合いがそこにはある。**名によって**とは、名の中へ、すなわち父、子、聖霊の神ご自身との

生きた交わりに入ることを表わす。また、後者の**教える**とは、教え続けるといふ継続を表す言葉であり、またその内容は、**命じておいたいっさいのこと**とあるように、山上の垂訓を初めとするこの福音書に記されているイエスの教えのすべてであると考えられる。**見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである** マタイによる福音書の特徴は、イエスを常に信仰者と共にいるお方（インマヌエル）として描いているということである（1・23、18・20）。マタイによる福音書のイエスは、徹頭徹尾「インマヌエル」で貫かれているといつてもよい。洗礼を受けて、主イエスの教えの一切を守ることができるのは、主イエスが信仰者と共にいてくださるからである。

最後に、この箇所に「すべての」「いっさいの」「いつも」という句が繰り返されていることも見逃すことができない。福音はすべての人間に、聖書におけるすべての内容を、すべての時に、主の弟子たちによって、伝えられなければならないのである。

参考図書 デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換上』（東京ミッシヨン研究所）、他

聖書

マタイ28・16～20

タイトル

一緒にいてくださるイエス様

暗唱聖句

見よ、わたしは世の終りまで、いつもあなたがたと共にいるのである。

マタイ28・20

目標

共におられる主を覚え、宣教に遣わされる者となる。

導入

(飯田勝彦)

新しい学年になり一ヶ月になりますが、少し慣れましたか？クラス替えのあったお友だちは、新しいお友だちが出来たでしょうか。もしかしたら、この連休にどこか一緒に遊びに行く人もいるかも知れません。もし、皆さんの友だちが「いつまでも離れずに、友だちでいよう」と言ってくれたらうれしいですね。

では、イエス様から同じ言葉を言われたらどうでしょう？イエス様は心から私たちに「いつも一緒にいるよ」と約束してくださいます。

イエス様の復活を信じる

イエス様は、どうして「いつまでも一緒にいる」と言っ

てくださるのでしょうか？それは、みんなを心から愛していてくださるからです。皆さんも大好きな友だちといつまでも一緒にいたい、と思うでしょう。イエス様も同じです。イエス様は、罪で苦しんでいる私たちを自由にするために十字架で死なれました。しかし、イースター礼拝で聞いたように、イエス様は死んで終わったのではなく、3日目に死の力に打ち勝って復活してくださいました。そして、弟子たちの前に自分が復活した事を現してくださいました。でも、弟子たちの中には、復活を信じる人と疑う人がいました。皆さんはイエス様の復活を心から信じていますか？「微妙」って言う人がいますか。イエス様の復活を信じるなら、私たちの心に力と大きな喜びがわき出てきます。イエス様は、皆さんがイエス様の復活を信じる事を願っておられます。

イエス様を伝える

復活されたイエス様が、弟子たちに「あなたがたは行って、すべての国民を弟子として、父と子と聖霊の名によって、彼らにバプテスマを施し、あなたがたに命じておきたいことを守るように教えなさい」と言われました。これは、イエス様の「大宣教命令」と言われるもの

です。イエス様は、弟子たちにイエス様の事をすべての人に伝えなさいと命令されたのです。私たちを愛し、力と恵みをいっぱい与えてくださるイエス様を、自分だけのものにしておいても良いでしょうか。

皆さんは、嬉しいことや楽しいことがあつたら友だちや、お父さんお母さん、兄弟姉妹に黙っていられなくて思わず話してしまうと思います。そのように、復活されたイエス様を多くの人たちに伝えていきましよう。イエス様が弟子たちに言われたこの「大宣教命令」は、今の私たちにも言われているのです。そしてイエス様は、皆さんがイエス様の事を一人でも多く人たちに伝えていくことを期待して、遣わしてくださるのです。

イエス様は共におられる

弟子たちにとってイエス様を伝えるに行くために、助けになったことは何だったでしょうか。それは、「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という約束でした。イエス様は弟子たちだけを宣教に行かせて「わたしは知りません。あとは頼みます」とは言われませんでした。イエス様は、弟子たちと共に行ってくださるのです。それも、世の終わりまでいつも共にい

てくださるのです。イエス様が十字架で死なれた時、弟子たちはイエス様を見捨てて逃げてしまいましたし、心の中で「もうすべてが終わりだ」と思ったでしょう。しかし、イエス様は、裏切った弟子たちを見捨てないで、復活され、彼らの前に現れたのです。そして「世の終わりにまで共にいる」と約束されました。

イエス様が弟子たちに言われたこの約束の言葉を、今朝、同じように皆さんにも言われます。皆さんがイエス様のことを思う時も思わない時も、どんな時でもどんな場所でも、イエス様はいつも共にいてくださるのです。そして、私たちを宣教のために遣わし、用いてくださるのです。イエス様のお役に立てるなんて素晴らしいですね。

まとめ

イエス様が死より復活し、世の終わりまでいつも共にいてくださると信じる時、皆さんの心は守られ力が与えられます。そして、喜んでイエス様を伝えることが出来ます。今も共におられるイエス様を信じて、喜んで家族や友だちの所に遣わされて行きましよう。

♪主がわたしの手を♪

(子どもさんびか89)

聖書 使徒1・9～11 テーマ キリスト再臨の約束

序論

(高橋頼男)

弟子たちが見ている前でキリストは天に上げられ、雲に迎えられてその姿が見えなくなりました。弟子たちがなお天を見つめていた時、二人の御使いが現れ「あなたがたを離れて天にあげられたこのイエスは、天に上つていかれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」と語りました。「イエスは、またおいでになる」というキリスト再臨の約束は私たちの大きな希望となりました。十字架、復活、昇天されたキリスト、私たちの主は、再びこの地においてになります。

一、同じ有様で(使徒1・11)

「天に上つていかれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」とは、いったいどういうことなのか。

主は40日に渡つてたびたびご自身を現され、弟子たちにはもはやキリストの復活、キリストが生きておられることを疑うことができない者、すなわち「復活の証人」とされたのです。

その後、主は弟子たちの前で天に上げられました。復活の主を見た弟子たちは、さらに昇天の主を見たのです。

主は再び来られるのですが、再臨のお姿は昇天のお姿とは明らかに異なっています。再臨の時、キリストは栄光を帯びて来られます。しかし、昇天の時と同じように、再臨の主は目に見える形を取つて来られるのです。今は、目に見えないで私たちと共に、私たちの内に(ガラテヤ2・20)おられますが、その時は目に見える形をとつて来られます。この意味で「あなたがたが見たのと同じ有様で来られるのです」。

「そのとき、大いなる力と栄光とをもつて、人の子が雲に乗つて来るのを、人々は見る」(ルカ21・27)

選ばれた者たちの救いの完成のために、天地万物が新天地に一新されるためにキリストはもう一度、栄光のうちに、目に見える御姿で来られるのです。

二、キリスト再臨の過程と私たちの状況

聖書の言う所によれば、次のような段階を経ることになります。

①主にあつて死んだ者は、死後直ちにパラダイス(安息の場)に移され、そこで主の再臨の時を待ちます(ルカ16・22、23・43)。

②主が再臨される時、まず、主にあつて死んだ人々が復活し、栄化された体をいただきます（イテサロニケ4・16、黙示録20・5）。

③彼らは、空中再臨された主のもとに引き上げられ迎えられます。また生き残っている信者も彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、いつまでも主と共にいることとなります（イテサロニケ4・16～17）。

このようにして、キリスト再臨の約束が私たちに成就されるのです。なんとこの素晴らしい救いでしょうか。これが、イエス・キリストにある私たちの救いの究極の姿なのです。

三、キリストの再臨に焦点を合わせる生き方

（ピリピ3・19～21）

このような再臨の約束は、私たちの生き方を一変させます。私たちの価値観、人生観、世界観を全く変えてしまいます。この約束は、私たちの新しい希望となり、人生の目標となり、生きる動力となります。

「我らの国籍は天に在り」（ピリピ3・20 文語訳）。このみ言葉は、葬儀の時のみ言葉や墓碑に刻まれるみ言葉だけではありません。再臨信仰の望みを持つ私たちの生き方を明らかにするみ言葉です。

文語訳聖書には、「されど我らの国籍は…」とあります。墓碑には「されど」が欠落してほとんど記されることはありませんが、この一句が大事です。キリストの再臨信仰と希望に生きるものは、この世が全てであるかのごとく生きる人々と生き方が全く異なってしまうからです。是非、ピリピ3章を文語訳で味わってみてください。

「彼らの終は滅亡なり、おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地の事のみを念ふ。されど我らの国籍は天に在り、我らは主イエス・キリストの救主として其の處より来りたまふを待つ。彼は萬物を己に服はせ得る能力によりて、我らの卑しき状の體を化へて己が栄光の體に象らせ給はん」

（ピリピ3・19～21 文語訳）。

この望みに生きる者は、十字架に敵対して歩んでいる人々とは一線を画して生きるのです。

結論

私たちの救いの究極であるキリストの再臨を信じ希望に生きる者は、その約束のみ言葉に焦点を合わせ、今の生き方をよく考えて生活を整え、大胆に勇気をもって生きる者とされるのです。

研究資料

(中島啓二)

キリストは復活後40日間の顕現の期間を経て昇天された。この直前には、「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて…わたしの証人となるであろう」(8)という聖霊降臨に伴う宣教の開始の約束(使徒行伝における宣教命令)が弟子たちに与えられている。また、直後には御使いを通して「イエスは…またおいでになるであろう」(11)と再臨の約束が与えられている。

この宣教命令、昇天、再臨の約束という流れは非常に重要である。「わたしが去って行かなければ、あなたがたのところ助け主はこないであろう…」(ヨハネ16・7)とあるように、昇天こそが聖霊降臨の合図を告げるものであり、その聖霊降臨を期して教会が誕生するからである。また宣教は、「この御国の福音は…、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」(マタイ24・14)とあるように、主の再臨の重要な鍵とされているのである。

キリストは昇天されたが、「あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にまで上られたかたなのである」

(エペソ4・10)とあるように、「世の終りまで、いつも」(マタイ28・20)、信じる者と共におられる。そして教会は、主の臨在の満たしのもとで宣教のわざに励みつつ、「アメン、主イエスよ、きたりませ」(黙示録22・20)と主の栄光の来臨の日を待ち望むのである。

テキスト

9 こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ 7〜8節のいわゆる宣教命令で、世界宣教の働きは、イエスが再び来られる時まで、弟子たちに委託・継承された。聖書における継承物語の代表としてエリヤとモーセが挙げられる。エリヤはエリシャへの継承の場面で、つむじ風に乗って天に上げられた(列王下2・11)。モーセの場合は昇天ではないが、ネボ山に登り、そこで葬られ、その職務はヨシhuaに受け継がれた(申命34章)。そのふたりとイエスの変貌山で会ったことは実に興味深い(ルカ9・28〜36)。**雲に迎えられて** 雲は神の栄光がそこにあることを象徴するものである。それは「幕屋に満ち」(出エジプト40・34)、「主の宮に満ちた」(列王上8・10〜11)。その雲が、昇天のときにイエスを迎えたのである。かの変貌山での出来事でも、「雲がわき起って彼らをおおいはじめ

めた」(ルカ9・34)とある。また、再臨の時には、「大いなる力と栄光とをもって、人の子が雲に乗って来る…」(マルコ13・26)とある。このように、変貌、昇天、そして再臨のそれぞれの中で、イエスの神的栄光があらわされているのである。**その姿が見えなくなった** イエスはよみがえられた時点で、すでに死と罪に打ち勝ち、神の右にあげられていた。40日間は、弟子たちに対する確かな証拠としての顕現の期間であって、それが今や満了したのである。なお、復活の体は栄光の体であって、食べたり、さわったりすることができが、同時に地上の体とは異なる、永遠の世界に属するものであった。

10 彼らが天を見つめていると 変貌山の場面では、「声が止んだとき、イエスがひとりだけになっておられた」(ルカ9・36)とある。このことから弟子たちは、今回も雲が消えた後に再びイエスを見ることができるとは期待して、見つめていたのかもしれない。**白い衣を着たふたりの人**が、だが、彼らが見たのはふたりの御使いであった。ルカ文書(福音書と使徒行伝)では、この箇所その他に、変貌山(ルカ9・30)と復活後の空の墓(ルカ24・4)の場面であつたりの天使的な人物が登場し、重要な証言をしてい

る。ちなみにふたりは証言の有効性のために必要な人数である(申命19・15参照)。イエスの神的栄光があらわされる三つの場面では、いずれもふたりの栄光に満ちた天使的な人物が登場することから、ここと空の墓の場面の御使いたちが、変貌山で登場したモーセとエリヤである可能性も否定はできない。

11 なぜ天を仰いで立っているのか この質問にはイエスが彼らのもとにとどまることを期待している弟子たちに対する叱責の調子が込められている。すでに弟子たちには事の成り行きが告げられていたからである。**あなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう** 弟子たちはイエスが力と栄光のうちに行くのを目撃した。それと同じように、力と栄光のうちにイエスは再び来られるということである。この世界には神のはつきりした意志と計画がある。私たちは忍耐と希望をもって主の来臨の日を待ち望みつつ、聖霊に導かれて生きるように求められているのである。

参考文献 注解書 I. H. Marshall (Tyndale), F. F. Bruce (NICNT), 斎藤篤美(新聖書注解 新約2) その他 IVP Bible Background Commentary: NT.

聖書

使徒1・9～11

タイトル

イエス様の約束

暗唱聖句

イエスは、天に上っていかれるのをあ

なたがたが見たのと同じ有様で、また

おいでになるであろう。使徒1・11

目標

復活昇天の主は再び地においでになることを信じる。

導入

(飯田勝彦)

皆さん、ゴールデンウィークを楽しんでいますか。今日は、子どもの日です。イエス様は、子どもの皆さんを心から愛しておられます。これからも、イエス様の愛をいっぱい体験して成長できますように！

皆さんは、今まで友だちと約束をしたことがあるでしょう。例えばどんな約束をしましたか？「今度一緒に釣りに行く」「遊びの約束」「今度、僕の消しゴムあげるよ」物をあげる約束、「このことは内緒にしておいて」秘密の約束、いろいろな約束があつたでしょう。約束はときに破られることがあります。皆さんはどうですか？約束を破られたら嫌な気持ちになりますね。約束は大切です。

今朝の箇所は、イエス様が私たちに約束してください、わたしが記されてあります。

聖霊を約束されたキリスト

三月三十一日は、何の日でしたか？イエス様が復活されたイースターでした。イエス様を信じて心に迎える人は、イエス様の新しい命、永遠の命をいただくことができます。復活されたイエス様は、四十日間多くの人々に現れて、ご自分が確かに復活されたことを証されました。そしてその後、イエス様は弟子たちに「エルサレムから離れないで、父の約束を待っているがよい。あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」と言われたのです。その聖霊を受けると力が与えられ、各地にイエス様を伝えて行く者にされると約束されました。何と嬉しい約束でしょう。これは、今を生きている私たちにも約束されているのです。

車は、エンジンがなければ走ることができません。そのように、イエス様を信じる者は、聖霊の力と助けがなければ喜んで生活することも、イエス様を伝えることもできないのです。聖霊の満たしは、求める人、信じる人に、そして従って行く人に与えられます。弟子たちは、

この約束を信じて真剣に祈り、ペンテコステの日に与えられました。イエス様の約束を信じて祈りましょう。

再臨を約束されたキリスト

聖霊の約束をされたイエス様は、突然、弟子たちの見ている前で天に上げられました。イエス様の足の裏に、ジェット噴射があつたわけでも、ロープで引き揚げられたのでもありません。本当に不思議な光景です。弟子たちは、目の前の出来事に茫然として、ただ空を見上げていました。弟子たちの中には、口をポカーンと開けている者もいたでしょう。すると、白い衣を着た二人の者が側にやって来て「イエスは、天に上って行かれるのをあなたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」と言ったのです。

これはイエス様が約束されていることでした。イエス様がまだ十字架にかかられる前、弟子たちに「人の子が雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう」と言われていたのです。

イエス様がクリスマスに來られた時は、私たちを救いに導くためでした。しかし、再臨される時には、その救いを完成するために來られるのです。

私たちがイエス様を信じると魂は救われ、永遠の命が与えられます。でも、この身体は死ななければなりません。なぜなら、身体は完全ではないからです。みんなも心では人に優しい言葉をかけたいと思つていても、つい嫌味を言つてしまったことがないですか。心と身体が、かみ合わない様なことがあります。救いは魂だけではなく、身体にもイエス様の救いが与えられます。それは、イエス様が再び來られる時におこるのです。イエス様が再臨されると、死んでいる者は復活し、イエス様と同じ栄光の姿に変えられるのです。そして、永遠にイエス様と一緒に過ごすこととなります。

まとめ

イエス様がいつ再臨されるかは分かりません。でも、「わたしは、すぐに来る」と言われたイエス様の約束は確かです。イエス様が來られることを祈りつつ、約束の聖霊に満たされて歩みましょう。

イエス様の再臨を信じて歩む人は、大きな希望をもつて過ごすことができるからです。

♪主にしたがいゆくは♪

(ホーリネス子どもさんびか87)

聖書 ルツ1・15〜18 テーマ 祝福された人

序論

(高橋頼男)

ルツ記は士師記の付録であり、サムエル記の緒言です。ダビデ家の起源を示すため、一つの意図をもって挿入された話です。ルツ記の主人公ルツは、モアブという異邦の女性でした。ユダヤから来てモアブに住み着いたナオミの子と結婚し、後に夫を失い、姑のナオミに仕えることを決意してイスラエルに来了のです。彼女は、ボアズとの再婚を通して、後に救い主の系図の中に組み込まれます。異邦人の女がイスラエルから出るメシヤの系図の中に入ることは、真に意味深く驚くべきことです。

一、ルツの決断と信仰(15〜18)

故郷の飢饉が去って再び繁栄を取り戻したことを知ったナオミは、寄留の地モアブからベツレヘムに帰ることを決意しました。そして、死んだ息子たちの嫁をそれぞれの故郷に帰そうとします。オルバはナオミの意を受け入れて離れていきますが、ルツはあくまでも姑から離れず、異国の地にまで共に行くと言い張りました。ルツの決断と行動は、姑ナオミに対する心から

の愛と尊敬から出たものでした。夫に先立たれ、二人の息子を失った天涯孤独の姑ナオミに、生涯をかけて仕えていくことを選び取ったのです。当時女性が夫と息子を失い孫もないということは、社会的な死を意味していました。それゆえナオミはまだ若いルツを説得してこの世の幸いを得るよう勧めました。しかし、ルツは姑と共にいることを選び、生涯をかけて姑に仕えることを切望したのです。彼女はこの世の幸福を超えたものを大切にしました。彼女は異邦の女性ですが、律法が命じる「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」(出エジプト20・12)という戒めを豊かに満たす生き方をしました。それで、彼女の行いと生活そのものが律法となっていたのです。「すなわち、律法を持たない異邦人が、自然のまま、律法の命じる事を行うなら、たとい律法をもたなくても、彼らにとつては自分自身が律法なのである」(ローマ2・14)とあるように。また、かたより見ることもない神様にとつて、異邦人の彼女こそ真のユダヤ人であったのです。「外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、…かえって隠れたユダヤ人がユダヤ人」(ローマ2・28〜29)である。

しかしまた、ルツの決断と行動は、信仰から出たものでもあ

りました。彼女はナオミを通してその神その民を、自分の神自分の民として選んだのです。ルツは親族や友人たちから離れ、同国人との再婚の望みを捨て、望みのない一人の老いた姑と共に、見ず知らずの異国に行く決心をしてぶれることがありませんでした。このルツの決断は、アブラハムの決心と似ています。国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、行く先を知らずして旅立ったアブラハムのあの信仰です（創世記12・1）。

ルツはまた、約束の地に宿る信仰を抱いていた信仰者の仲間とも言えます。「しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさどであった」（ヘブル11・15～16）とあるように。

ルツはあくまでも姑ナオミと行動を共にすると決めました。そして、ナオミの行くところどこまでもついていくのです。それは、クリスチャンが、生涯をかけて愛する主にごこまでも従っていくことの模範でもあります。「彼らは…小羊の行く所へは、どこへでもついて行く」（黙示録14・4）とあるように。ルツは優れた信仰と徹底的な従順を持っていた人でした。

二、ルツの報い（4・18～22）

姑ナオミに従ってユダヤの地に來たルツは、懸命に姑に仕え

ます。異国の地におけるその純粋な仕える姿は、周囲の人々にも好意をもって受けとめられました。そして図らずも誠実で信仰深いボアズとの出会いが備えられていました。

ボアズとの正式な結婚を通して、ルツはメシヤの家系につながる者となって行きます。ボアズからルツを通してオベデが生まれ、オベデからエッサイが生まれ、エッサイからダビデが生まれます（マタイ1・5）。そして、このダビデの末から救い主が誕生するのです。ルツという一異邦人女性の一族の中で現された信仰が、やがて民族を越え、世界の大きな救いにかかわっていくのです。だがそのようなことを想像することができたでしょうか。土師記からサムエル記に向かうイスラエルの歴史は不信仰が蔓延する闇と混沌の時代でした。そのような時代にあつて、神と人に忠実に仕えたルツの信仰は、荒野の中のアオシスのようにきよく慰めに満ちた信仰の物語です。

結論

神を愛し、人を愛して生きたルツの真実できよい信仰と愛の生活にならない、主に従い神に祝福される生活と生涯を送る決意をいたしましょう。

研究資料

(金井由嗣)

文脈と思想

最初に、もし千代崎秀雄『虹色の落ち穂』を手に取ることができれば、冒頭部を一読して「ルツ記」とその登場人物についてのイメージをつかんでおかれることをお勧めする。本書が旧約正典に入れられたのは明らかにダビデ王との関係によるが、単にダビデの祖先についてのエピソードを記したというだけではない。本書には、豊かなメッセージが込められている。

「ルツ記」は、苦難の人生を誠実に生き抜いた魅力的な女性たちの物語である。当時は、女性が男性に依存しなければ生きていけない社会と、宗教に基づく民族共同体の狭さの下にあった。その中で、彼女たちは社会の規範に従いつつ、一対一の人間関係において誠実な愛情に基づいた行動をとり続けることで、その社会の「狭さ」を乗り越えていく。我々は「垣根を越える信仰」の豊かさを、彼女たちから学び取ることができる。

モアブ人であるルツが夫の存在なしにイスラエル社会に入っていくことは、ルツ自身にとっても、受け容れる

側の社会にとっても、決して容易なことではなかった(申命記23・3)。しかしルツは、イスラエルの神「主」に対する真実な信仰としゅうとめのナオミに対する真実な愛によって人々の信頼を獲得した。更に、亡夫の嗣業を残すという神の民の義務に忠実に行動することによって、神の民としての資格を認められるに至ったのである(2・11-12)。後にルツは、ダビデ王、そしてイエスキリストの系図に名を連ねることとなるのである。

もう一人の主人公であるナオミの人柄について触れておく。ルツは明らかにナオミと共にいることを強く願うが故にナオミの神「主」を受け容れたのであって、その逆ではない。苦難の中でも唯一の神に信頼して明るく生き抜くナオミの豊かな人間性が、この物語のそもそもの発端である。この見地からすれば、1・20-21の彼女の言葉は自分の人生を嘆く愚痴ではなく、苦しみの中でも自分を客観視できる心のゆとり(ユーモア)の表れとみなした方がよい(千代崎)。

背景

レビラト婚と親族による「あがない」 申命記25・5以下に、子どもがいない夫婦の夫が死んだ場合、兄弟の

一人が結婚するようにとの規定がある。この場合、最初に生まれた子どもは法的には死んだ元夫の子として、その家名と土地を嗣^{つぎ}ぐことになる（学界では「レビラート婚」と呼んでいる）。ルツ・11は、この制度を前提として理解される。律法では兄弟についてしか書いていないが、エリメレク一家のように兄弟が皆死んでしまった場合、もつとも関係の近い親族に拡張して適用されていたようである。土地の「あがない」（買い戻し）についてはレビ25・25以下にその規定がある。この二つの規定を同時に履行^{りやう}した場合、ルツと結婚する者はナオミが管理するエリメレクの土地を買い戻した上で、ルツとの最初の子どもをエリメレクの相続者として買い戻した土地を嗣^{つぎ}がせる義務を負うことになる。

テキスト

15 自分の民と神々のもとへ帰って行きました 古代において、民族と宗教は不可分の関係にあった。モアブの民族神ケモシユを中心とする多神教世界がオルパとルツの本来の世界である。夫の死後もナオミに忠実を尽くした後で元の世界に帰って行ったオルパの行動は、当時の基準では十分に賞賛に値するものであった。

16 あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神です 前記の理由から、ルツがナオミについてイスラエル社会に入ることは、ナオミの神「主」を自分の神とする「改宗」を意味した。自らの意思に基づくルツの決断は、当時にあつては極めて異例のことであつた。ルツはナオミの人格に強く惹^ひかれると共に、ナオミの人生の基盤が「主」を畏^{おそ}れる信仰にあることを認めていたのである。

17 そのかたわらに葬られます 出身民族の神を捨てることは、本来の同族社会との決別を意味する。年齢からいってナオミが先に死ぬことは当然予想されるが、その後も身寄り一つないイスラエル社会で生涯を終えることを、ルツの決断は含んでいた。主よ、どうぞわたしをイスラエルの神「主」に向かつて誓うこと自体、ルツがすでに主を信じる信仰に生きていることを示している。すでに彼女はモアブ人の社会とその宗教に決別していたのである。

参考図書 千代崎秀雄『虹色の落ち穂』、レオン・モリス（ティンダル聖書注解）、K・D・サーケンフェルド（現代聖書注解）。

聖書

ルツ・15-18

タイトル

ルツの決心(母の目)

暗唱聖句

あなたの民はわたしの民、あなたの神

はわたしの神です。

ルツ・16

目標

神を愛し、人を愛して、神に祝福される生涯を送る。

導入

(松浦みち子)

今日は「母の目」です。みなさんを生み、育ててくださった
いるお母さんに心から感謝を表しましょう。お母さん、ありが
とう！

二人のお嫁さん

モアブという国に、ナオミという女の人がいきました。この人
は昔、夫と二人の息子と一緒にイスラエルの国からやってきた
のです。でも、夫も二人の息子も次々と死んでしまい、今では
ナオミと息子たちのお嫁さん二人の、あわせて三人だけが残さ
れました。お嫁さんの一人はオルバ、もう一人はルツと言いま
した。

ある日、年を取ったナオミはもう一度、出身地であるイスラ
エルの国に帰ろうと思い、お嫁さんたちに「わたしはね、ふる

さとへ帰ろうと思うの」と言いました。「じゃあ、お母さん、
私たちも一緒にしますわ」、三人は荷物をまとめ、イスラエル
に向って出発しました。しかし、ナオミは旅の途中で、ふと足
を止め「あなた達にお話しがあるの」と言いました。「お母さ
ん、何でしょう？」ナオミはお嫁さんたちにこう言いました。
「今まで、息子やわたしに親切にしてくれてありがとう。あな
たがたはまた若いのだから、自分の家に帰りなさい。神様があ
なたがたを祝福し、幸せにしてくださいますように」と。「い
いえ、お母さん、私たちは一緒にいきます」と、二人は泣きな
がら答えました。しかし、ナオミは二人の将来を思いやつて
「お帰りなさい。もう、わたしにはあなたがたの夫になるよう
な息子はいないのだからね。ふるさとのモアブに帰って幸せに
暮らさない」と言いました。二人はまた声をあげて泣きまし
た。なお続いてナオミが強く勧めるので、お嫁さんの一人オル
バは、泣く泣くナオミにお別れを言って、モアブの国に帰って
いきました。

ルツの決心

ところが、もうひとりのお嫁さんのルツは、ナオミにすがり
ついて離れようとしません。「ほら、オルバは帰って行きまし
たよ。あなたもそうしなさい」、ナオミがそう言うるとルツは答

5月

12日 礼拝メッセージ例

えました。「いいえ、お母さん。わたしにお母さんから離れて家に帰ることを勧めないでください。わたしはお母さんのふるさとと一緒にいきたいのです。お母さんがどこに行かれても、お母さんの行かれる所にわたしも行き、お母さんと同じところに住みたいのです。お母さんのふるさとイスラエルの民は私の民、あなたの神はわたしの神です」と、涙ながらに懇願します。ルツはナオミの息子と結婚しナオミと生活を共にするうちに、ナオミの信じるイスラエルの神様を信じるようになったのです。モアブの偶像を捨て、一生、真の神に従って行くというルツの信仰告白でもありました。さらにこうも言いました。「お母さんの死なれる所でわたしも死に、そのそばに葬られたいのです。もし死に別れでなく、わたしがお母さんと別れることがあれば、神さまどうぞわたしを罰してください」と。何とルツはナオミを愛し敬っていたことでしょう。そして何と深く神様を信じていることでしょう。ルツにとつては、ナオミと離れることはその信仰を失うことでもあったのです。ナオミと行くこれからの未知の世界でどんなことが待ち受けているかも知れない不安があつても、また夫と死別するというような試練を通してゆるぎない信仰をルツはナオミをとおして培っていたのです。ルツのひたむきに神様に従って行くこうとする姿

勢は、私たちの模範ですね。

現代のルツさん

名古屋生まれのある婦人のお話をしましょう。この方は、名古屋の学校を卒業すると故郷を離れ、やがてある男性と出会い結婚して大阪に住むようになりました。その男性のお母さんはクリスチャンでした。やがて彼女はお母さんの信じるイエス様を信じ教会に通うようになりました。そして、救われていない夫のためにお母さんと心合わせて祈るようになりました。それと同時に名古屋にいる自分の家族の救いのためにも祈ったのです。ある日、実父が重い病気になり、何度も大阪から見舞いに通い、祈り励ましました。お父さんは、いよいよ病が重くなつた時、病床を訪ねた松浦牧師から福音を聞き、病床洗礼を受けました。そしてこう言いました。「わたしはイエス様を信じてよかった。何百万、何千万をもらうよりうれしい！」と。そして、平安のうちに天国に旅立っていかれました。また、その後長年祈ってきたご主人も救われ、今では夫婦そろって主に従う信仰の道を歩んでおられます。まさに現代のルツさんですね。神様は昔も今も変わりなく、主を信じるものに真実を表してくださるのです。あなたも主に従っていきましょ。

♪イエスさまにみちびこう♪（ふくいん子どもさんびか）

聖書 使徒2・1～11 テーマ ペンテコステの恵み

序論

(大頭真一)

ペンテコステは、聖霊が弟子たちの上に降^{くだ}った日である。聖霊に満たされることは、私たちにどのような変化をもたらすのだろうか。

一、聖別

聖霊に満たされた後の弟子たちの生活についてルカは記す。①いっさいの物を共有。資産や持ち物を売っては、必要に応じて分け合った(44～45) ②心を一つにして、礼拝と聖餐^{せいさん}と賛美の日々を過ごし、すべての人に好意を持たれていた(46～47)。これはかつて主イエスが教えられた二つのいましめの成就であった。それは「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ」と「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(マタイ22・37～39)。すなわち神と人へのまっただき愛であり、これこそウェスレーが聖^{きよ}めの定義として好んで用いたものである。

まっただき愛を現実に生き抜かれたのは主イエスご自身であった。だからまっただき愛とは主イエスのように生きることである。けれども主イエスの生涯の果てには十字架の死があった。主のように生きるとは主のように死ぬことである。「進んで死なれた神にならう」ことがまっただき愛であり、そのためには自分の命を神のために明け渡すしかない、現代のウェスレーアンであるキンローは述べている(『キリストのように生きる』)。

私たちにとって、このことは厳しすぎるように思われる。だが主の命令は私たちを束縛するためではなく、解放するためであることを忘れてはならない。神を知らず暗やみの中に生きていた私たちの罪ゆえに、主は十字架にかかってくださった。それは、私たちが自己中心の生き方から抜け出すためであって、主は罪と妥協をなさらない。御霊に満たされるときに、私たちはキリストの思いとここに生きることができる。そして、暗やみを憎み、神と人へまっただき愛を注ぎだすのだ。

二、宣教

「そして主は、救われる者を日々仲間に加えて下さった」

たのである」(47)は聖霊に満たされることのもうひとつの結果を示す。このみ言葉が前述の44〜47節に続いているのは偶然ではない。宣教は聖さの実である。「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて：わたしの証人となるであろう」とあるが、この力は人々をなぎ倒すような霊力といったものではないことに注意を要す。キリスト者の自分を投げ出す生き方を見て、このような人々はいったい何者だろうか、この世はいぶかしむのである。

宣教の動機もまた御霊によつて与えられる。聖霊に満たされるときに救われない者は滅びるという真理が鮮やかになる。そのとき宣教は片手間ではできなくなり、私たちをとらえて離さない関心事となる。御霊は神の思いを教える。神が滅んでしまつたまじいに痛む、その痛みを知るときに、私たちは祈り宣べ伝えずにはおられない。

宣教の能力もまた御霊によつて与えられる。14節からのペテロの説教は旧約聖書を自在に用い、キリストの十字架と復活の福音を余すところなく語るものであった。その結果「その日、仲間に加わつたものが三千人ほど」

(41)という大リバイバルが起こつた。御霊は私たちにみ言葉を理解させ、語らせ、聞く者を揺り動かす。

ペテロたちが用いた「他国の言葉」は御霊の働きの本質を物語る。かつてバベルの塔を建てようとしたときに諸言語の間に壁ができた。御霊は今、その壁を越えてみ言葉を宣べ伝えさせた。人々はただ奇跡を見て信じたというのではない。そのとき人々は「心を刺され」て、「兄弟たちよ、わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか」と救いを求めたのであった。

結論

すべてのキリスト者は聖霊に満たされて生きるとしてと招かれている。それはキリスト者にとって選択可能なオプションではない。もし、私たちが聖霊の満たしを求めないならば、私たちの信仰はゆるやかな麻痺^{まひ}を始めるだろう。礼拝は形式的に、宣教はおざなりになり、この世への関心が神への愛にとつてかわるようになる。それは私たちにとつて取りかえしのつかない損失である。そして、だれよりもそれを惜しまれるのは神である。

研究資料

(宮澤清志)

本日は聖霊降臨日(ペンテコステ)である。この箇所は、その聖霊降臨日によく開かれる聖書の箇所であって、毎年開かれる箇所の一つである。しかし、それゆえに、様々な思いこみや、み言葉体験も持っている箇所でもある。説教者は、全く初めて聞くみ言葉としてこの箇所を黙想し、この聖霊降臨の出来事をより視覚的にイメージして望みたい。

なお、聖霊降臨は、広義では旧約における神の預言の成就であるが(ヨエル2・28)、ルカ文書においては復活の主の約束の成就である(ルカ24・49)。なお、ヨエルの言葉もルカの言葉も、使徒1・4〜5、8のみ言葉に重なる。

テキスト

1 五旬節の日がきて この言葉は、大麦の収穫の初穂の束をささげてから50日目という意味である。すなわち過ぎ越しの祭の後の最初の日曜日から数えて50日目に祝われる祭りであることからこの名がある。また「きて」という言葉には、単なる日の流れという意味よりもむしろ、決定的な時の充満によって起こる出来事が到来したという意味を含んでいる(ガラテヤ4・4参照)。すなわち聖霊降臨の

約束(1・4〜5、8)が成就されるまでの期間が満了し、預言の成就の日が来た、という決定的な出来事の到来を意味する **みんなの者** 120名ばかり(1・15)のことと思われる。しかし、中にはいわゆる「使徒集団」という説もある。一緒に 原始教会の理想的な一致団結ぶりを示す使徒行伝特有の言葉(1・15、2・44他)。この言葉は詩篇133・1にも現れており、使徒行伝以前には、この語は「集会」や「共同体」との関連において用いられている。

2〜4 これらの節に記述されている、聖霊の降臨の外的なしるしが史実であつたかどうかと問うことは、恐らく無意味であろう。激しい風も、炎の舌も、一つのしるしとしてとらえる考え方が一般的である。しかし、だからといってこの箇所をただで片づけてしまうことは、この節の持っている真の意味を薄めかねない。つまり聖霊の満たしとは、結果として外面的な、目に見えるしるしが伴う、ということである。聖霊に満たされるとは、主観的な自らの内的経験であると同時に、客観的な他の人からもそのような見える経験として現される。なお、「風」「炎のような舌」「現れ」は、旧約では具象的な神顕現を表す。「風」とはその同義語である「霊」の降臨を表し、「舌」は「言葉」「異

言」とその同義語である「言語」を表している。なお、この「炎」と「舌」は、主語を「炎」（単数）にするか「舌」（複数）にするかでその解釈が分かれている。

2 突然 驚くべき天来の超自然的な現象を印象づける語。続く「天から」の「音」という言葉と共に、この出来事が神の直接的働きの事件であることを描写している。

5〜8 聖霊降臨の出来事に対する群衆の驚きが記される。4節までの出来事を聞いて、集まってきたのは、七週の祭りを祝うためにエルサレムに集まってきたいた 信仰深いユダヤ人たち であった。「信仰深い」という言葉はユダヤ人に対してのみ用いられており（他にシメオンとアナニヤ、それにステパノを葬ったユダヤ人）、この奇跡は、彼らが証人となった事実を明確に記している。また、物音については、激しい風が吹いてきたような音 か、もしくは 聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した 声か、はつきりしない。しかし、文脈から考えて、他国の言葉で話し出した声が有力ではないかと考えられる。それによって、自らの生まれ故郷の言葉を聞いた信仰深いユダヤ人たちの「驚き」「怪しみ」すなわちあつげに取られた様子をさらに際立たせている。驚

き とは、心を奪われるほどの大きな驚きであり、我を失ったというほどの大きな驚きを意味する。また 怪しんで とは、非常に広い意味範囲をもつ言葉であるが、いずれにしてもその奇跡に立ち会った人々の尋常ならざる驚きが記される。

9〜11 この地名のリストについては、辞典などで調べて頂くことが望ましい。パルテヤ人、メジヤ人、エラム人もあれば、メソポタミヤ とは、ユダヤの東方の地方の名称であり、カバドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤ とは、ユダヤから見て北西にある、いわゆる小アジア地方にある都市の地名である。またこれらの地方から見えて南西側にある都市が エジプトとクレネに近いリビヤ地方 であり、そこから遠く離れて西側にある地方が ローマ である。このローマだけが唯一ヨーロッパ本土の地名であることは興味深い。また、人種からいえば、ユダヤ人と改宗者 とあるように、天下のあらゆる国々から 来ていた人々であった。なお、改宗者 とは、異邦人でありながらユダヤ教に改宗した人々のことである。

参考図書 榊原康夫『使徒の働き 上巻』（いのちのことは社）、F・F・ブルース『使徒行伝』（聖書図書刊行会 他

聖書

使徒2・1～11

タイトル

聖霊に満たされよう！

暗唱聖句

一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。

使徒2・4

目標

聖霊に満たされ、造り変えられて生きる。

導入

(飯田勝彦)

教会には、三つの大きな祝いがあります。

皆さん、分かりますか？一つは、イエス様の誕生をお祝いするクリスマス。二つ目は、イエス様が死からよみがえられたイースター。そして、三つ目はイエス様の約束された聖霊が降ったペンテコステです。今日は、ペンテコステの礼拝です。これは私たちにはとても大きな恵みなのです。

約束の聖霊に満たされた

先週、イエス様が天に上げられる前に弟子たちに約束されたものがありました。何でしたか？そう、聖霊です。その聖霊を弟子たちはどこで、何をしながら待ったでしょうか？エルサレムで多くのの人たちと心を合わせて熱心に祈りながら約

束の聖霊が降るのを待ったのです。皆さんは、弟子たちのように祈ることができましたか？

イエス様は、聖霊がいつ降るかについてお話になりませんでした。でも、弟子たちは聖霊が与えられるまで必死に祈りつづけたのです。すると、イエス様が天に上げられて10日後（ペンテコステの日）に不思議なことが起こったのです。皆が祈っていると突然、「ゴォー！」っと激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、その音が家中に響きました。さらに、舌のようなものが、炎のように分かれて現れ、一人一人の上にとどまったのです。すると皆が、聖霊に満たされました。イエス様の約束されたとおりになったのです。

聖霊によって変えられた

イエス様は、弟子たちに、聖霊が降るとどうなると言われていましたか？イエス様の言葉にも「一度耳を傾けてみましょう。」ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。そう、力が与えられ、イエス様を多くの人たちに伝えて行く人になると言われたのです。力を受けるとは、何か急に筋肉がムキムキになって力持ちになることではありません。イエス様のことを、

多くの人たちに伝えることができます力なのです。

イエス様の弟子たちは、聖霊に満たされるまではどうだったでしょうか。彼らの心の中は、恐れや疑いで満ちていました。でも、この聖霊に満たされてからは180度、変えられたのです。弟子のペテロさんもその一人でした。かつてペテロさんは、イエス様を裏切った人でした。でも、そのような弱さをもった人にも聖霊は注がれたのです。

聖霊は強い人や努力する人、頭の良い人だけに注がれるものではありません。イエス様を信じ、聖霊を祈り求める人には、誰にでも注いでいただけるのです。聖霊に満たされたペテロさんは力が与えられて、人を恐れないでイエス様を伝える人に変えられました。他の弟子たちも、各地に遣わされて行きました。

例話

昔、イギリスにウィリアム・ケアリーという人がいました。彼は、小さな村の貧しい靴屋の子どもでした。そんな中でも彼は両親と共に教会に通っていました。16才の時、靴屋の見習いのために故郷を離れます。職場の友人に誘われて教会の集会に出ました。彼は、そこで聞いたメッセージに感動して、信仰の目が開かれたのです。彼の心の中にイエス様を伝えた

いとの思いが与えられて仕事をしながら準備をしていました。そして25才の時に牧師となったのです。ある朝、世界地図を見ながら祈っている時、聖霊に導かれて「私はあなたのそばにいます。私を遣わして下さい」と祈りました。やがて彼は、イエス様を伝えるためにインドに遣わされました。生活習慣、食べ物や気候が全く違うインドでの生活は大変でした。でも、祈りと涙の伝道の中で、イエス様を信じ救われる人たちがたくさん起こされました。インドに来て数年経った時、奥さんや息子が天に召されて行きます。ケアリーにとっては大きな悲しみでした。しかし、聖霊に満たされていたケアリーは、あきらめることなく力強く、イエス様を伝えて行つたのです。(立石靖夫著『リバイバル人物伝』)

まとめ

聖霊には、ものすごい力と恵みがあります。

皆さんは、この聖霊に満たされたいと思いませんか？イエス様は、皆さんに聖霊を注ぎたいと願っておられます。聖霊に満たされ造り変えられて、多くの人にイエス様を伝える人にされましょう。

♪風がやってきた♪

(子どもさんびか70)

聖書 使徒3・1～10 テーマ キリストの名による歩み

序論

(石田高保)

私たちは生きてゐる限り、自分のためだけでなく、誰かのために役に立ちたいと思います。誰かの役に立っていると感じる時、生きる喜びを感じるのではないのでしょうか。クリスチャンは、人の役に立つだけでなく、内におけるイエス様によつてその人を生かす力が与えられているので、生きる希望と力をお分ちすることが出来ます。

一、神は希望を与えようとしておられる

〈生まれながら足のきかない男が、かかえられてきた、4章22節では40歳あまりの人とあります。何十年も物乞いをして暮らしてきました。この箇所を見る限り、彼の唯一の望みは、その日食べていけるだけのお金をもらうことだけだったようです。この後すぐに、自分が歩けるようになることなどは、全く思いつきもしなかったでしょう。目に見える世界がすべてでした。私たちの中にも、この男性のように将来を自分で見限っている人はいないでしょうか。未来には希望が抱けず、不安や諦めが横たわっていること

はないでしょうか。あるいはそういう人が身近にいないでしょうか。しかし将来を小さく見積もらないようにと願います。神は私たちの生活と生涯に丁寧に関わっていて下さり、たとえ困難な出来事に会つても、そのことを越えて新しい事をなして下さるからです。

〈ペテロとヨハネとは彼をじつと見て〉、彼らは人生を諦め、希望を失つたこの男性を見たとき、内側から憐みの心と、イエス様なら何かをしてくださるという信仰が湧き上がりました。彼らはしゃがんで、この男の人と目を合わせました。苦しんでいる人を上から見下ろすのではなく、自分たちも同じ立場に身を置いて、彼の視線に立ちました。このことは私たちが身の周りの人とのように接すればよいかを教えられます。自分に悩みを打ち明けてくる人に対して、私たちは自分の経験したことであるかどうかに関わらず、共感できるように祈りたい。それはすぐにアドバイスするのではなく、まずはその人の心の痛みを受け止められるように祈ることです。ただひたすら耳を傾けるためには、自分の思いを十字架に付ける必要もあるでしょう。

この男性は、ペテロとヨハネとが「わたしたちを見なさい」と、自分に声をかけて来たので、よっぽどたたくさんの

お金を施してくれるのではないかと期待しました。しかし「金銀はわたしには無い」という言葉にがっかりしたでしょう。ところがペテロはこの男性にとつて、お金よりはるかに大切なもの、彼の問題を根本的に解決するもつと良いものを提供しようとしていました。それは彼がイエス様を信じて、生きる希望を持つことであり、さらに彼が歩けるようになって、自分で生計を立てられるようになる道です。私たちは身の周りの人の当座の問題が解決されることを主に助け求めると共に、その人の魂が救われるという根本的な解決を求めていききたいと思います。

二、神は人をおして働かれる

「しかし、わたしにあるものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によつて歩きなさい」、この言葉を聞いたとき、イエス様ならこの自分を救つてくださる、いやしてくださるに違いないという信仰が働きました。これについてペテロは解説して、「わたしたちが自分の力や信心で、あの人を歩かせたかのように、なぜ見つめているのか」(12)と、自分の力ではないとはつきり言い切っています。「イエスの名が、それを信じる信仰のゆえに、あなたがたのいま見て知っているこの人を、強くしたのであり、イエ

スによる信仰が、彼をあなたがた一同の前で、このとおり完全にいやしたのである」(16)。

「イエス・キリストの名」とは、復活して生きておられるイエス様の力という意味です。私たちもお祈りをした最後に「イエス・キリストの名」によつて祈りますが、それは、今ここにおられるイエス様により頼んで祈るという意味です。「ふたりまたは三人が、わたしの名によつて集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ18・20)、イエス様の名前には力があります。私たちも、これほどの力があることを信じて、イエス様の名前で祈りましょう。人に対しても声を出して祈つてあげましょう。事実、この出来事のように、生まれながら40年間、歩くことのできなかつた人が、リハビリもしないで、飛び跳ねるまでに瞬間的に癒されたのですから。

結論

あなたも、「わたしにあるものをあげ」ることができます。それは「わたしの内に生きておられるイエス様の力」です。私たちはこれを周りの人に差し出すことができるのです。

研究資料

(宮澤清志)

先週のペンテコステの日の出来事の後、主の弟子たちは2・43〜47に記されている生活へと変えられた。その一端が、この3〜4章に垣間見える。特に、ここでは「絶えず宮もうでをなし」(2・46)た弟子たちの姿が語られており、またそれはどのような行為を意味したか、ということが一つのエピソードを通して語られる。しかしそれは、この後のキリストの教会の歩みにとって決定的な意味を持つようになったのである。

テキスト

1 午後三時の祈りのとき 夕べのささげものの時(出エジプト29・39以下)に続いて行われる祈りのとき。ユダヤ教では一日に3度祈りの時が定められている。使徒たちは、ペンテコステの後も律法を守り、ユダヤ人と同じように神殿での礼拝や祈りの時に集っていた。

2 生れながら足のきかない男 「生まれながら」直訳では「母の胎から」。この男の素性については知られていないが、「四十歳あまりの人であった」(4・22)といわれている。かえられてきたとは、新改訳では「運ばれて来た」であり、成人してからかえられてきたとしても20年あまりの歳月を

運ばれ続けられてきたのであろうか。少なくとも、この男はここで体の癒しを望んではない。

3〜5 ここにおいては「見ること」に注目して黙想したい。

3 見て 見る、認める、気づく、といった、ごく普通の「見る」という言葉。

4 じつと見て バウアーは「緊張して何かに、あるいは誰かに視線を向けて見ること」と説明する。使徒行伝の別の箇所では「にらみつけて」(13・9)と訳している。奇跡物語でよく用いられる言葉であり、ペテロの権能が宿った、力のこもった視線であった。

5 注目して 見つめて(新共同訳)、目を注いだ(新改訳)。しっかり捉える、自分の力の中に保持する、というニュアンスを持つ言葉。何らかの精神的な働きに心を向けるという意味を持つ。

このように3〜5節には、それぞれ異なった「見る」という言葉が用いられており、それらの相違による登場人物の心の動きを思いめぐらすだけでもこの箇所の黙想が豊かにされる。

6 金銀はわたしには無い ただ単に持ち合わせがなかったということもあるかもしれないが、2・44以下の、いわゆる私有財産の放棄ということとも併せて理解することもできる。

そして、その後にくこの物語全体のピークへの序論ということもできる。**イエス・キリストの名によって、歩きなさい**

この箇所は、この物語全体の重要点である。後のペテロの説教の中で、ペテロは幾度となく「名」という言葉を用いてこのしるしの本質を語っている（3・16、4・10、12）。ここでは、イエスの「名」とは、ただの記号ではなく、人を強くし、また救いうるところの「実態」である。まさに「イエス・キリスト」の実在そのものであるということが出来る。

特に、ルカは「イエスの名」による奇跡を強調する。この名に救いがあるのである（使徒4・12）。キリストの名を呼ぶこと、その名を唱えることが意味を持つのである。この名に基づいて神が働かれるのである。使徒行伝は、この名に基づいて神が働かれた歴史である（3・6、4・7、10、12、30、10・43、19・13）。

7・8 ペテロは、ただ前節のように命じてそれっきりでではなかった。彼は、自ら手を伸ばして彼の右の手を取って立ち上がらせたのである。ここは重要である。私たちは、み言葉を語りっぱなしであってはならない。み言葉を語ったならば、今度はそのみ言葉が成就するように行動しなければならぬのである。もしペテロが彼の手を取って起こすことをしなかつ

たならばどうであつたらうかと考えることも、説教を豊かにする秘訣である。

しかし、ここで彼の体を立ち上がらせたのは、紛れもなく**イエス・キリストの「名」**であることを忘れてはならない。

8 躍りあがって立ち、歩き出した 躍り上がるとは、雄鹿のように飛び跳ねる様子を描き出しており、イザヤ35・6の預言の成就を示唆している。そして、**…神をさんびしながら、彼らと共に宮にはいつて行った** 物乞いをしていた男が祈る者とされたのである。この男の奇跡のクライマックスがここにおいて起こるのである。障害を負っていた彼に対して閉ざされていた神殿に入るのである（レビ21・18、20）。癒された後、彼はもとの生活へと戻っていったのではなく、その生命が新しくされ、新たな生涯、祈りと賛美の生活が開かれたのである。イエスの「名」とは、ただ単に癒されたというにとどまらず、救いと新しい生命へと人々を招き入れる「名」なのである。

10 驚き怪しんだ 新共同訳では「我を忘れるほど驚いた」とあり、驚きの度合いがうかがえる。

参考図書 加藤常昭編訳「説教黙想集成3 書簡」（教文館）他

聖書

使徒3:1-10

タイトル

イエス様からパワーをもらおう！

暗唱聖句

ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい。
使徒3:6

目標

キリストによって力強くされる。

導入

(飯田勝彦)

私たちは、いろんな力に支えられて生活しています。どんな力がありますか？電力、風力、火力などたくさんあります。特に電力には、大変お世話になっていますね。電力がないと、電車は動きません。パソコンやゲームもできません。オール電化の家では、電力がなければ生活できませんね。

先週は、ペンテコステ礼拝でした。臆病であった弟子たちが変えられました。それは、ある力によってでした。何の力だったのでしょうか。それは、聖霊でした。聖霊の力に満たされた弟子たちは、変えられてイエス様を証する人とされました。

今日は、一人の男性が聖霊の力によって変えられたお話しです。

絶望の中にいる男

ここに登場する男性は、生まれたときから足が悪く、一人では歩くことが出来ませんでした。この男性は四十歳位の人でした。ということは、彼は約四十年間も歩けないで不自由な生活をしていたのです。働くこともできないので、神殿に来る人たちから施しを受けていました。もちろん、自分の足で神殿に行くことはできません。男性は、他の人に運んでもらって神殿に置かれていたので。もし、皆さんがこの男性と同じ立場だったらどんな気持ちでしょうか。おそらく、この男性は自分の人生に希望を見いだせず、絶望の中にいたでしょう。また、人に迷惑を掛けている自分を責め、人生をあきらめていたのではないのでしょうか。

人生をあきらめ希望がない生活は、どんなに辛いことでしょうか。そのような人生を過ごしている人が、今増えています。皆さんは、どうですか。

力を与えられた男

男性がいつものように神殿でものごいをしていると、そこにペテロとヨハネが祈るためにやってきました。多くの人が男性を見て見ぬふりをして通り過ぎていきまし

た。しかし、ペテロたちは違いました。彼らは、男性をじっと見つめたのです。何かもらえると男性は期待しました。しかし、ペテロは「私にはお金はない。でも、私のもっているものをあげよう。ナザレ人イエス・キリストの名によって歩きなさい」と言ったのです。それだけでなく、ペテロが男性の手を取って起こしました。すると、足と、くるぶしが強くなり、四十年も歩くことすらできなかった男性が、何と踊りあがって立ち、歩き出したのです。そして、全身で神様を賛美したのです。それはペテロを通して、イエス・キリストの力がこの男性に働いたからです。ペテロは、イエス・キリストが救い主であることをしっかりと信じていました。イエス・キリストの力は、イエス様を救い主と信じる人に、そして信じる人を通して働くのです。

例話

もう天に召されましたが、田原米子さんというクリスチャンがいました。彼女は、十六歳の時にお母さんを突然亡くしてから、本当の生きる意味を求めて悩んでいました。でも、その答えが見つからず、早くお母さんの所へ行きたいと思い、ある日、線路に身を投げました。幸

い、命は助かりましたが、身体に大きな障がいが残ってしまったのです。米子さんは、絶望の中で入院生活をしていました。そんな中で、毎週、宣教師と一人のクリスチャン青年が訪ねて来るようになりました。最初、米子さんは、話さえ聞こうとしませんでした。後、イエス様の十字架の愛に触れたのです。そしてイエス様によって救われ、心が変わられたのです。

その後、米子さんは、障がいを持ちながらも、救われた喜びを多くの人々に伝えました。絶望の中にいた米子さんを自由にしたのは、イエス・キリストの力だったのです。

まとめ

私たちが生きていくためには、多くの力が必要ですが、何よりもイエス・キリストの力が必要です。イエス様から力を受けている人は、罪から自由にされ、いつも喜び、たえず祈り、すべての事に感謝する素晴らしい人生があらわれます。

皆さんは、もうイエス様から力を頂いていますか？

♪友よあすがやこう♪ (子どもさんびか67)

聖書 使徒5・1～11 テーマ 悔るべきではない神

序論

(石田高保)

聖霊降臨を経て新しくされた「信じた者の群れ」は、心も思いも一つにしましたが、経済的な面においても、それぞれの持ち物を共有するような驚くべき一致を見るようになります。これは誰かから強制されたことではなく、全く上からの恵みに応答し、それぞれが自発的にしたことです。たとえ群れの相互扶助や宣教のために自分の財産を処分しなくても、他のメンバーから責められる性質のものではありません。まったくの自由意思で、自由な金額ですることでしたが、あろうことか偽りの心で金銭を提供するメンバーも出てきました。それが、このアナニアとサツピラという夫婦です。

一、神を欺く行爲

彼らは所有していた土地を売却し、群れの必要のために提供しようとしていました。それ自体はほめられるべきことですが、過ちを犯していました。それは売却代金の一部を自分の懐に取っておきながら、残りのお金を差し出して、「これが売却代金の全額です」と偽ったことです。自分の嘘はばれないと

思ったのでしようが、ペテロからすぐに見抜かれて「あなたは、自分の心をサタンに奪われて、聖霊を欺き」と言われ、さらに「あなたは人を欺いたのではなくて、神を欺いたのだ」とまで言い当てられています。

聖書によれば、献げものや施しは、「惜しむ心からでなく、また、しいられてでもなく、自ら心で決めたとおりにすべき」(Ⅱコリント9・7) 性質のものです。つまり神様は、与えようとする人の動機に関心を持っておられることになります。彼らの場合は「惜しむ心」がせつかくの善行を汚れたものにしてしまいました。たとえ良い行いであっても、いやいやながらとか、罪悪感を味わいたくないからとか、見返りを期待する動機で人に与えるなら、それは、「神への香ばしいけにえ」とはなり得ないでしょう。

恐るべきことに、ペテロの譴責の言葉が終るやいなや、アナニアはその場で倒れて息が絶えてしまいました。妻のサツピラも夫と口裏を合わせて偽り通したため寸分たがわず同じ目にあっています。いったいどういうことなのでしょううか。

二、神を畏れる心

二度も同じことが起きたということは偶然ではなく、罪に對する神のさばきがただちに下ったということです。彼らは

うつかりしていたのではなく、共謀してごまかした確信犯です。しかも考えを翻すチャンスはありません。当然、悔い改めるようにとの聖霊の促しも受けたはずですが、それにもかかわらず自分たちの意思を押し通したのです。彼らは「心を合わせて主の御霊を試み」たと断罪されています。初代教会の聖霊の著しいお働きの中で、共同体の倫理的な秩序を保つため、神に打たれるような事態が起こったのでしょうか。しかしこの時代でさえこのようなことが頻繁に起こったとも思えません。またこういうことが現代の教会にも起こりうることも断言できませんが、神が心の内をすべてご覧になることを見て、神を畏れるべきことを教えられます。「神の慈愛と峻厳しゅげんとを見」（ローマ11・22）る思いがします。共同体に走ったこの思いがけない痛みを彼らは教訓としたことでしょう。（教会全体ならびにこれを伝え聞いた人たちは、みな非常なおそれを感じた）とあります。

しかしこの辺りの適用は慎重を要します。私たちの罪に対する神のさばきはキリストの十字架において完了しており、悔い改めるなら即刻ゆるされ、さばかれることはありません。「こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められることがない」（ローマ8・1）からです。しかし罪

を自覚しながらも、それを楽しんでいたり、手放さなかったりしていつまでも悔い改めないでいるならば、何らかの形でさばかれることがあるかもしれません。神は途方もなく寛容な方であると高たかをくくることが賢明ではないでしょう。なぜなら「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない」（ガラテヤ6・7）からです。しかし神は私たちをできる限り痛い目にはあわせたくない、そこで少しでも早く、自発的に悔い改めることを願っておられるのです。

結論

アナニヤとサツピラのように、私たちも罪を犯したら即座にさばかれるわけではないですが、神が私たちの思いと言葉と行いとを全部見ておられるという畏れは持つべきでしょう。人に言えないような罪を行っていたら、ただちにそれを悔い改めて赦ゆるしていただきましょう。自分ひとりでは手に余る場合には他のクリスチャンに立ち会ってもらって悔い改め、その人に赦しを宣言してもらい、定期的に関わってもらおうとよいでしょう。「互に罪を告白し合い」（ヤコブ5・16）とあるように、説明責任を負い合う関係を持つっていると誘惑により強く立ち向かえるようになるからです。

研究資料

(宮澤清志)

ペンテコステ以来、教会は目に見えて成長していった。歩けない人を歩かせ、大胆に神の言葉を語っていった。その人数も120名(1・15)から三千人(2・41)になり、そしてこの物語の直前には五千人ほど(4・4)になっていた。

しかし、このような時こそサタンの働く機会となる。サタンは巧妙に教会の内部からその魔の手を伸ばしていた。

多くの注解者は、この物語を4章32節から始まっていると解釈している。それゆえ説教者は、4・32〜37にもよく目を通していただき、その内容を把握して当該箇所の備えをしていただきたい。

テキスト

1〜2 **共謀**^{きぼう}して この両者の罪深い要素の一端がここに垣間見える。いわゆる「出来心」ではなく、**共謀**して という事実である(新改訳や新共同訳は「妻も承知のうえで」となっており、受けるニュアンスが若干弱い)。あらかじめ両者は打ち合わせたうえで、という意味が含まれる。

1 **アナニヤ** 「主は恵み深い」という意味の名である。当時のユダヤではありふれた名であったようである。**サツピラ**

「美しい」という名。

2 **ごまかし** 新改訳は「残す」であり、着服するという意味が含まれている。なお、七十人訳聖書では、この語はヨシュア7・1のアカンに対して用いられている。

3 ここでペテロがアナニヤに対して問うていることは、①なぜ地所の代金をごまかしたのか、②なぜその心をサタンに奪われたのかの2つである。そのことが分離されて問われているのではなく、一つのこととして問われている。**自分の心をサタンに奪われ** 直訳は「サタンがおまえの心を満たし」となる。サタンとは、新約聖書においては、別名「試みる者」(マタイ4・3、1テサ3・5)、「訴える者」(黙示12・10)とも呼ばれているように、人間の外側から人間の「心」(人格の中心)に働きかけ、そしてついにはこれを「支配する」実在的な力(シユラッター)。ルカは、このアナニヤとサツピラのほかに、イスカリオテのユダにもこのサタンがはいったとしている(ルカ22・3)。**聖霊を欺き** 彼らの罪の最大の源は、この「聖霊を欺いた」ことにあった。サツピラにも同様の趣旨の叱責をしている(5・9「主の御霊を試みる」)。原始教会において、聖霊を欺き、試みる罪はもつとも重大であり、この世でも、また来るべき世においても赦^{ゆる}されること

はないとされていた（マタイ12・31～32）。

4 4・36～37のバルナバの行為同様、アナニヤとサツピラは兩人とも自ら進んで地所を売り、その代金をささげた。しかし、それは彼らの自由な自発的行為であり、問題は教会の交わり（助け合い）と個人の自由意志の兩者の間にある態度の問題であろうと考えるべきである。どうして、こんなことをする気になったのか 直訳は「なぜこんなたくらみがあなたの心の中に置かれたのか」となる。アナニヤは人間に対する悪巧みであつたつもりであろうが、それらは結局のところ、聖霊なる神に対する悪巧みなのである。それは、代金をささげる行為と決断とは聖霊によつてなされたものだからである。

5～6 アナニヤの死は、単なるショック死ではなく、またペテロの処罰でもなく、ペテロ（使徒）を通して語られた聖霊なる神による裁きである。それは、たとえばある写本では「倒れて」の前に「たちまち」を挿入していることからも理解できる。人間の心のうちをすべて見通すことのできる聖霊なる神のご臨在のもとに生きるということは、これほどまでに緊張感にあふれたものであるということを、私たちは忘れてはならない。それゆえこのことを伝え聞いた人々も、その圧倒的な臨在に非常なおそれを感じるのである。息が絶えた

神の裁きによる死であることを強調する。なお、聖書の中で、この言葉によつて死を迎えた人物は、アナニヤとサツピラのほかにシセラ（士師4・21）とヘロデ（12・23）だけである。

7～8 三時間ばかりたつてから 集会が長時間であることを示しているが、この3時間の間に教会ではどのようなことがなされていたのかを思いめぐらすこともまた意味がある。

彼女にむかつて言つた この言葉の取り方によつて、2つの理解がなされる。まず、この言葉を翻訳の通りに理解すると、ペテロはサツピラに対して悔い改めの機会を提供していると考えることができる。しかし、「言つた」を直訳すると「答えた」であり、この箇所においては問いのない答えとなる。するとここではサツピラに対して真実を告白する最後のチャンスを与える意図は無いと考える立場もある。

9 前半のペテロの言葉は、その真意としては3節の言葉と同じである。

11 教会 使徒行伝の中で、この言葉が用いられるのはここが最初である。

参考図書 日本基督教団出版局編「説教者のための聖書講解使徒行伝」（日本基督教団出版局）他

聖書

使徒5・1～11

タイトル

神様を畏れて生活しよう。

暗唱聖句

教会全体ならびにこれを伝え聞いた人

たちは、みな非常なおそれを感じた。

使徒5・11

目標

神を畏れ、真実な生活をする。

導入

(飯田勝彦)

皆さんは、家が停電になったことがありますか。

雷などの影響で、しばらく停電になることがあります。

真つ暗な中、ロウソクや懐中電灯で過ごします。でも、停電が2～3日続いたらどうでしょうか。アメリカである時、大規模な停電がありました。賑やかな街が突然、真つ暗になったのです。しかもそれがしばらく続き、大変なことが起こりました。多くの人たちがスーパーから商品を略奪し始めたのです。暗くて誰も見ていないと思うと、自分の欲望を丸出しにしてしまう人がいます。もし、皆さんならどうでしょうか。アナニヤとサツピラの心は、暗闇で覆われていたのです。

神様に喜ばれない生活

聖霊を受けた弟子たちによって、次々と救われる人々が起こされていました。ときには、一度に数千人の者たちが救われたのです。聖霊の働きとそのパワーは素晴らしいですね。聖霊によって教会は祝されて行きましたが、逆に悲しいことも起こりました。信徒の中にアナニヤとサツピラという夫婦がいました。当時、多くの人たちが神様にささげるために、自分の財産を喜んで教会にもって来ていました。アナニヤたちも土地を売ったお金を携えてきたのです。もし、皆さんがお母さんから献金のために五百円もらったとします。でも、二百円を献金して、残りの三百円でお菓子を買ったとしたら、これは献金をごまかしたことになりますね。アナニヤは、土地を売った代金をごまかして持ってきたのです。そして、これがばれてしまいました。アナニヤがしたことは、人をごまかしただけではなく、神様をごまかしたことになるのです。アナニヤは神様に嘘をつき、自分勝手な行動をしてしまったのです。それは、自分の欲のためでした。しかし、アナニヤたちのことを神様はご存じでした。神様は、人は見ることでできない心を見ることがおできになるからです。アナニヤは、神様をあざむ

いたため神様に打たれて死にました。そのあとにサツピラも夫と同じように代金をごまかしたために、死んでしまったのです。

私たちの心の中が罪に支配され、真つ暗であつたなら、誰にも見られていなかったり、知られていなかったりすると、おそろしいことをしてしまうことがあります。自己中心や嘘、ごまかしなどに染まつた生活は、神様に喜ばれません。

神様が喜ばれる生活

アナニヤとサツピラの出来事は、教会やそれ以外にも多くの人の耳に入りました。そして、それを聞いた人たちは皆が恐れました。アナニヤやサツピラの出来事を通して、教会や多くの人たちは、神様は、神様をあざむく者をそのままにしておかれないと知つたのです。神様は聖なるお方ですから、少しの汚れや罪もそのままにしておくことはできません。罪や汚れは、裁かなければならないのです。

私たちの心の中には、アナニヤやサツピラのようにごまかしや自己中心などの罪、汚れがないでしょうか。誰にも分らないと思つていても、神様はご存知です。もし、罪

をそのままにしておくならば神様は悲しまれます。それは、罪があるなら神様と愛し合うことができないからです。そればかりか罪のある心は、私たちの生活も苦しくしてしまうのです。

皆さんは、神様に喜んでいただき、自分自身も幸せな生活をしたいと願うでしょう。もし、罪を犯すことがあつたとしたら、それを隠さないで素直に神様に告白し悔い改めることです。神様は、イエス様の十字架の血潮でそれを赦してくださいます。

神様は、神様を畏れる者を喜ばれます。畏れとは、恐れではありません。神様のことをいつも第一に考え、神様の喜ばれることに心を向ける人が、神様を畏れる人なのです。神様を畏れる人は、祝福されます。

まとめ

聖い神様を畏れ、神様の前にいつも素直に生きる者にされましょう。聖霊はそのために力を与えてくださいます。

♪おまもりください主よ♪

(ホーリネス子どもさんびか100)

聖書 IIコリント2・12～17 テーマ キリストの香りとして

序論

(石田高保)

宣教にはいつも困難が伴うが、それを乗り越えたとき必ず実が結ばれることを、パウロは体験していました。ですからコリントの同労者に対して、決して諦め^{あきら}ないようにと励ましています。福音宣教の戦いは、勝つか負けるかではなく、あらかじめ勝つことが約束されている戦いを勝ち取るもの、という確信が強調されています。

一、福音宣教の影響力

〈神はいつもわたしたちをキリストの凱旋^{がいてん}に伴い行き〉、パウロを始め福音宣教の同労者はキリストを凱旋將軍とし、自らを従軍しているキリストの兵士になぞらえています。また、宣教の戦いにおいて勝利し、凱旋行列の榮譽にあずかっている者とたとえています。実際、ローマ軍の凱旋行進ではローマの神々への感謝をあらわす薫香がたかれ、沿道はその香りで満ちたと言います。それを宣教の勝利にたとえて、〈わたしたちをとおしてキリストを知る知識の香りを、至る所に放つて下さるのである〉と、言っています。

誰^だが香りを放つて下さるのかというと、それは神です。私たち自身が香るものではありません。どのような香りかという、それはキリストがどんな素晴らしいお方であるかを分からせるという香りです。それは必ずしも直接福音を言葉で伝えることではなく、何らかの愛のわざを行うことによるのです。人は愛されることが、つまり大切に扱われることによって心を開きます。じっくり話を聞いてもらった、苦しいときタイムリーに助けてもらった、孤独なときそばにいてくれた、など。私たちが主により頼みながら、愛の行為に一步踏み出すとき、愛された人は普通の人間関係にはない神的なものをそこに見出すのです。つまりキリストの香りがたつわけです。

どんな香りも鼻がすぐ嗅^かぐように、キリストの香りもすぐ人が気づきます。〈わたしたちは、救われる者にとっても滅びる者にとっても、神に対するキリストのかおりである〉、キリストのことを少しでも証しするとき、どちらの人に対しても影響力を持つということではないでしょうか。

ただしキリストの香りは結果的に人を二分します。〈後者にとつては、死から死に至らせかおりであり〉、凱旋行列の香りもかく人によって意味が全く変わるといいます。ローマ軍に負けた捕虜にとつて、沿道の香りは、処刑か奴隷かの

運命をいやがうえにも意識させたことでしょう。その比喩の意味するところによれば「滅びる者」とは、主を受け入れようとしない人のことで、こういう人にとって、キリストの香りは何の魅力もありません。それどころか、やがては死と滅びに至ることも知らないのです。

いっぽう「前者にとつては、いのちからのちに至らせるかおりである」、凱旋將軍と兵士たちにとつて、沿道の香りは勝利の榮譽をいやが上でも増し加えるものでした。この比喩の意味するところによれば「救われる者」とは、主を受け入れた人のことです。こういう人にとつてキリストの香りはますます永遠の命を望ませます。「おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになる」(マタイ13・12)とあるとおりです。

二、福音宣教の心がまえ

「いったい、このような任務に、だれが耐え得ようか」、このように福音を語ることによって、聞く人が拒むことによつて滅びに至ったり、受け入れることによって命に至ったりすることになるという務めは、考えてみれば畏れ多いものです。結果については語る人にすべての責任があるわけではありませんが、神に用いられやすいよう自分を整える責任はありま

す。

では福音を語る場合の心構えはどんなものでしょうか。「真心をこめて、神につかわされた者として神のみまえて、キリストにあつて語る」とあります。つまり、神が自分をつかわしたのだから神が責任をとつてくださるのだ、という信仰を持つことです。相手にふさわしい内容を神がその場で語らせて下さるという信頼があると、力まないで済みます。また神のみまえて語るとありますから、相手の話を受けとめながら主に尋ねつつ福音を語るということです。教科書的な伝道フレーズを並べるだけでは相手の心に届かないでしょう。双方向の会話により、相手との信頼関係をとおして福音はより力強く届くのではないのでしょうか。

結論

キリストの香りとは、つまるところ福音宣教するときに醸し出される影響力ということができるとしよう。未熟であつても、経験が少なくても、伝えようとする人をおして主は著しく働いてくださいます。自分を整えてから伝えるのではなく、伝えつつ自分を整えるという同時進行でよいのです。なぜなら私たちが香ばしいのではなく、私たちの内におられるキリストが香ばしいのですから。

研究資料

(小平徳行)

ここにはパウロの任務の性質と神がいかにして、困難の中にもかかわらず、彼の宣教の働きを支え、祝福して下さっているかが語られている。これは本書簡の全体に流れている主要テーマである。

テキスト

12〜13 トロアス エペソの北方にある町。「トロアス」とは「トロイの近く」という意味である。アレクサンドロス大王が自分の名に因んで「アレクサンドレイア」と付けた町はいくつかあり、それらを区別するために、この町は「トロイの近くの」という修飾語が付けられた。それを通称「トロアス」と呼んだ。パウロの時代において重要な港町であり、商業の中心地であった。**門が開かれた** これは伝道の門戸が開かれたことを意味している。エペソ伝道の時にもこのような表現が使われ（Ⅰコリント16・8）、エペソに教会が生み出されただけでなく、コロサイやラオデキヤなど、その地域の他の都市にも福音がもたらされることになった。トロアスもそのような可能性を秘めた伝道地であったかもしれない。**兄弟テト**

スと会えなかったので、わたしは気が気でなく ここでパウロはコリントに遣わしていたテトスに会うことを期待していたが、それができずにコリント教会の事を思っ
て心配していたのである。そこで有望な伝道地であったトロアスを後にしてマケドニアに渡り、テトスと会うことができ、教会の状況を聞いてパウロは安心したのである（7・5〜16）。いかにパウロがコリント教会のことを親身になって心配していたかがわかる。

14 **神は感謝すべきかな** ここまで幾分重苦しい記述が続いたが、ここからは、感謝にあふれて、神がいかなる時にも、あらゆる場所で、パウロが効果的な働きをすることができるようにして下さったことが語られている。**キリストの凱旋に伴い行き** これは古代ローマにおける戦争の勝利の後に行なわれた凱旋行列（勝利の行進）を念頭に置いている。凱旋將軍と兵士がローマに帰ってくる際、おびただしい敵の戦利品や、鎖につながれた捕虜たちがその後が続いていた。ちょうどこれと同じように、いかなる困難の中にあっても神はパウロと彼の同労者たちを、凱旋行列における勝利した兵士として導いてくださるのである。ここはパウロが自分自身や同労者を（キ

リストの恩寵に捕えられた」捕虜という立場に置いてい
ると解釈する学者もある。それ自体はとても大切な視点
であるが、文脈から考えると不自然ではないかと思われ
る。大切なことは、いかなる困難にもかかわらず、キリ
ストにあつて勝利者であるということである。わたした
ちをおしてキリストを知る知識のかおりを、至る所に
放って下さる。凱旋行列の道の所々には神々にささげる
香がたかれて、よいかがりが天に立ち上つていたように、
パウロが福音を真心をこめて、キリストにあつて語る時
(17)、キリストを知る知識のかおりが広がっていく。キ
リストを知ることが救いのための中心的な事柄である。

15-16 救われる者にとっても滅びる者にとっても 凱
旋行列における香は、勝利した將軍や兵士たち、そして
彼らを歓迎する観衆にとつては喜びを連想させるかおり
となり、捕虜とされた者にとつては、彼らを待ち受けて
いる奴隷や死を連想させるものとなる。同様に、福音が
語られる時、人々はそれを受け入れて救われるか、受け
入れないで滅びに至るかの二通りの応答に分かれる。い
つ、このような任務に、だれが耐え得ようか この務
めは人々に非常に厳粛な結果をもたらすゆえに、パウロ

であつても、自分がこの務めに不適格だと叫ばずにはお
れない。しかし、神が選ばれ、必要な力を与えて下さ
るがゆえに適格な者として、この務めを果たすことができ
るのである(3・5)。旧約時代のモーセもしかりであ
る(出エジプト3・10-14)。

17 神の言を売物にせず 「売物に」するとは「行商す
る」が原意。当時の行商人がその場限りの不誠実な商売
をしたことを背景としている。新改訳では「混ぜ物をし
て売る」。当時、このような人々が大勢コリント教会に
潜入していた。彼らはパウロの語ったことを否定し、ユ
ダヤ教的、異教的教えを混ぜていたのである。神の言で
ある福音には何物も付け加えてはならないし、差し引い
てもならない。

参考図書 山中雄一郎『コリント人への手紙』『実用聖
書注解』、尾山令仁『コリント人への手紙第二』『新聖書
注解』(以上のちのこ出版)・The IVP Bible
Background Commentary: NT, Colin G. Kruse
2Corinthians (The Tyndale New Testament
Commentaries) など

聖書

タイトル

暗唱聖句

Ⅱコリント2・12～17

キリストの香りとして

わたしたちをとおしてキリストを知る

知識のかおりを、至る所に放つて下さる。

Ⅱコリント2・14

目標

キリストを知る知識の香りを放つて生きる。

導入

(水野晶子)

今日は「花の日」「こどもの日」です。アメリカのある町の教会から始まった記念日です。

一八五六年、今から一五七年も前のことですが、六月の第二日曜日に、リボンで結んだたくさんの花を教会堂に飾り、大人と子どもと一緒に礼拝をささげました。その教会のレオナード牧師が、この年七歳になった子どもたちの名前を呼んで、一人一人の頭に手を置いて祝福を祈り、名前と生年月日と牧師のサイン入りの聖書をプレゼントしました。これが最初の「花の日」「こどもの日」の礼拝でした。礼拝後、飾られた花を持って、病気の人のお見舞いやお世話になっている人たちに、お礼に行く

ようになって、花の日が広まって行きました。

私たちの香り

花の香りはとてもすてきです。心を和ませ、元氣を与えてくれます。私たちの香りはどんな香りでしょうか？ガムを噛んだときのようにさわやかな香りでしょうか？シャンプーやせっけんのように清潔な香りかな？それとも汗臭い？靴下の泥くさいにおいかな？自分にも周りの人にも、よい香りと感じるものもあれば、鼻をつまみたくなるような嫌な臭いもあります。外側だけでなく、あなたの内側から放たれる香りはどうでしょうか？

キリストの香り

イエス様の時代に、ローマの將軍と兵士が戦いから勝利して帰ってくると、人々は道に香をたいて神々に感謝をささげました。しかし行列の後ろには奪い取ってきたものや捕らえられた人々が鎖につながれていました。この時の香りは勝利した人々にはうれしい心地よい香りですが、負けた人々にとつては、殺されるか奴隸になるかを感じさせられるとつてもいやな香りとなりました。

このことにたとえて、パウロさんは、イエス様のこと、救いのこと、福音を真心こめて語る時、キリストを知る

6月

9日 礼拝メッセージ例

知識の香りが広がっていくことを手紙で知らせました。キリストの香りはイエス様を救い主と信じた人々にとっては、神様の愛を感じ、勇気と希望を与える香りとなりました。イエス様を信じない人々は、この香りには何の魅力も感じないし、恐ろしい死と滅びに至るという事も知らないのです。だから、イエス様を信じてほしいと真心から伝えるのです。しかし信じて救われる人と、受け入れないで滅びに向かう人の二つに別れてしまうことは、とても辛くて耐えがたいことだとパウロさんは言いました。でも、神様が必要な力と愛とを与えて、務めを果たすことができるようにしてくださいなのです。

例話

テリー・ヘイファーという気が短くて、すぐ手を出す少年がいました。ブラック・コブラという不良グループに入って、いつもナイフを持ち、黒のジャンパーを着て、気が荒く、家族や周りの人たちをハラハラさせていました。こんなことを続けていてはいけなそうと思っていたテリーは、高校一年の夏に教会のバイブルキャンプに参加し、イエス様を信じました。新しく生まれ変わったテリーはクリスチャンにふさわしい生活をしようと決心しまし

たが、不良仲間が再び仲間を引き入れようとやってきて、「クリスチャンのおまえとどっちが強いを試してみようじゃないか」と、決闘を申し込まれました。公園で、付き添いは三人、ナイフなしでこぶしでの戦いとのこと、断れず、教会に相談に行きました。牧師は「約束の場所に行っても決して戦わないこと」と教え、Ⅱコリント2・14～15を読んで、祈りました。テリーは、何度もこのみ言葉を口ずさみながら、決して戦いませんでした。決闘にならないことに腹を立てた相手は、使われないと約束したナイフを出し、襲い掛かりテリーの腕にナイフが刺さりましたが、テリーは手を出しませんでした。一週間後、あの不良少年が「クリスチャンにどうしたらなれるか、教えてほしい」とやってきたのです。キリストの香りは周りの人の心を動かしたのです。

(シヨート・メッセージ一〇〇より抜粋)

私たちもイエス様のことをよく知って、イエス様のよ
うに愛に生きるとき、キリストの香りが周りの人々に届
けられます。

♪ シャロンの花 ♪

(新聖歌二八六番)

聖書 ガラテヤ4・1〜7 テーマ 神の子として

序論

(金井信生)

今日は「父の日」です。この日私たちは、肉親の父親に対する感謝を深くするとともに、天の神様を父と呼んで信頼することのできる幸いをおぼえます。

一、神の子である恵みを知らなかった

「子ども」と言うときに、親子の関係においての子どもを意味する場合と、未成年者を指す場合があります。パウロがまずここで取り上げているのは、救われる前の私たちは未成年者と同じであったということです。

未成年者も、ごく幼い時から、親に守られ育てられていることや、愛されていることはわかります。しかし、「あれをしてはいけない」とか「このようにしなさい」としつけられなければならない時期もあります。それは、まだ自分で考えて判断し正しく行動する力がないからです。

また親の財産についても、法律上の権利はあるのですが、幼いために法律の存在をよく知りませんから、自分

の好きなように使うことはできません。親の言いつけを守ることにしても、財産に手出しできないことも、(僕となんの差別も)ありませんでした。

これが、キリストに救われていない人間の姿です。目に映るまま、心の引かれるままに行動しようとし、戒められなければ正しくなれず、正しく歩んでも心のうちには反発や窮屈さをおぼえるばかりでした。

二、キリストによって神の子とされた

キリストによって救われるとは、神と親子の関係にあることがはつきりされることです。イエスは弟子たちに、「天にいますわれらの父よ」(マタイ6・9)と祈ることを教えました。私たちが失っていた、神に対して「お父さん」と心から呼びかけることができる関係を作ってくださったのです。

また、日々の生活の中でイエスは、天の父に祈る姿を弟子たちに示されます。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ7・7)や、「父よ、わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します」(ヨハネ11・41)と願いごとをされました。それだけでなく、「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけて

ください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」（ルカ22・42）と、祈りの中で示される父の御心に自ら従う子の生き方をあらわされました。

イエスは（律法の下に生れ）ましたが、他のすべての人のように律法に縛りつけられ、苦しめられていたのではありません。律法を与えられた天の父の思いに自分を沿わせることで、律法を完成し、十字架に神の義を全うしてくださいました。

そして十字架によつて信じる者すべてに、神の〈子たる身分を授け〉てくださいました。「未成年者」としてではなく、成人してなお親を敬い、親の持つ財産を、その願いに沿うように生かして用いていくことのできる者としてです。

三、大胆に神を父と呼ぼう

生涯、天の父の子としての自覚をもつて生きられたイエスには、聖霊の助けと導きがありました。そして、イエスは弟子たちに、「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。それは真理の御霊で

ある」（ヨハネ14・16、17）と、十字架につけられる前に約束されました。また復活後、天に昇られる前に、「あなたがたは間もなく聖霊によつて、バプテスマを授けられるであろう」（使徒1・5）とも約束されました。

イエスは弟子たちの弱さを知っておられましたが、同じ聖霊の助けによつて強められ、守られて父なる神の恵みをあらわす器となることができると信頼してくださいました。

ですから、主イエスを救い主と信じ、同じ聖霊が私にも注がれ、心と生活を満たしてくださいと信じるなら、私たちも天の父を（アバ、父よ）と親しく呼ぶことができるのです。そして、どんな時でも父なる神様を避けどころとして平安と希望を得、御心に従つて神の恵みをあらわす生き方が形作られていくのです。

結論

主イエスを信じ、神の子としていただいた恵みをおぼえ、父なる神との親しい交わりの中で生きる者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

信仰者は、旧約時代と新約時代も同じ救いの約束による相続人である。ここでは新約時代の恵みの新しさが示されている。それはキリストが来臨され、御子の御霊を心に送ってくださった結果、神を「アバ、父よ」と呼んで礼拝することができる者とされた事である。

テキスト

1~2 ここでは相続人となる前後の相違に注目し、ローマの家庭における未成年者の扱いに関する当時の慣習を引き合いに出して説明している。ローマ法によれば相続人である子が14歳になるまでは、父親の定めた後見人のもとに置かれ、財産の管理の面では彼が25歳になるまで管理者に一任された。子供[キ]ネーピオス 「未成年者」の意。律法の下にある者たちの状態は、相続人が未成年者である時の状態に他ならず、未熟で、自由がなく、むしろ束縛された者である。

3 もろもろの靈力[キ]ストイケイア もともとはアルファベット文字を指していたが、そこから2つの意味が派生

した。①宇宙を構成する基本的な要素(地、水、火、空気を意味し、それが特に天体に宿る「諸靈力」としてヘレニズム世界において畏敬された。②アルファベットの学習のような「初歩的段階の教え」。8~11節から判断すれば「諸靈力」の意味に取れるが、ここでは律法の初歩的な性格が強調されていることからすれば「初歩的な教え」と取ることも可能。新改訳では「幼稚な教え」と訳されている。パウロはおそらく、迷信や律法主義などに束縛されている状況を憂い、両方の意味をこめて用いたのであろう。縛られて[キ]デドウローメノイ 「奴隷とされる」の意。

4 女から生れさせ 神の御子が人間性をとって世に來られた事を指す。御子イエスを通して現れてくださった神は、遠く天上から私たちを眺め、指図されるお方ではなく、人となって、罪以外は、すべての弱さ、痛み、悲しみを私たちと共に背負われたお方である。律法の下に生れさせ 御子が律法の支配下に生きることにより、律法の要求を引き受け、そののろいをともに受けるために來られた事を強調している。おつかわしになった 生

ていたお方が世に遣わされたことを示している。

5 御子の派遣の目的が示されている。律法の下にある者をあがない出すため 「あがなう」とは代価を払って買い戻すことを意味する。私たちを律法ののろいから贖い出すために、主が支払われた代価は、ご自身のいのち（血潮）であった。子たる身分[キ]フィオセシア 法律用語で「養子」のこと。パウロは養子縁組の制度を用いて説明している。ユダヤ人も異邦人も皆、キリストにある神の恵みによって子たる身分を受けるのである。

6 送って下さった この動詞の時制は不定過去形であり、私たちの心に一回限りの出来事として聖霊が遣わされたのである。この賜物は養子を真正正銘の子にするために必要である。私たちの心に聖霊がおられることにより、私たちは神の子であることを確信し、信頼をもって祈ることができるのである。アバ 家庭内で子が父を呼ぶ場合に使われた日常的なアラム語。神に対する呼びかけに「アバ」が用いられる例はユダヤ教にはほとんどなく、むしろそれは避けられていた。神をこのように呼び始めたのはキリストである。そして、キリストは御霊により私たちのうちにとどまって「アバ、父」と呼び続け

させてくれる。呼ぶ[キ]クラゾー ワタリガラスのような鳴き声の擬音語で「大声で叫ぶ」の意。「言葉にあらわせない切なるうめき」（ローマ8・26）のような、深い感情を表現する叫び。

7 子[キ]ヒュイオス 「息子」の意。家族の中で奴隷と対極にある立場。1、3節の「子供」とは異なり、相続人としての資格を持った成年である。したがって、この世のもろもろの霊力や律法の支配下から完全に解放され、キリストにある真の自由が与えられている。したがってガラテヤの信徒が再び律法の下に戻ろうとするのは、成年から未成年へ逆戻りするような愚かなことであった。神とキリスト者は、主人と奴隷の関係ではなく、無条件の愛に根ざした親子の関係なのである。神による相続人キリスト者が相続人とされるのは神の主権的な恵みによることを強調している。

参考図書 宮村武夫『ガラテヤ人への手紙』『実用聖書注解』、村瀬俊夫『ガラテヤ人への手紙』『新聖書注解・新約2』（以上ののことは社）、藤本満『ガラテヤ人への手紙』（イムマヌエル綜合伝道団出版局）など。

聖書

ガラテヤ4・1〜7

タイトル

呼べるんだ、「お父さん！」って

暗唱聖句

「アバ、父よ」と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。ガラテヤ4・6

目標

神の子として、父なる神との親しい交わりの中で生きる。

導入

(和田 治)

今日は「父の日」ですね！いつも、お仕事がんばってくれてくれるお父さんに、心を込めて「ありがとう」と伝えましょう！

でも、色々な理由で、お父さんにありがとうって言えないで「辛いな、寂しいな…」って思ってる、そんなお友だちも、今日、来ているかな？どうか知って下さい！あなたの「天のお父さま」がどんなにあなたを愛して下さるかを知れば、心がぽかぽかあったかくなつて力が湧いてくるんです！暗唱聖句の「アバ、父よ」というお言葉、お家の中で、子どもが「お父さん！」「父ちゃん！」「パパ！」って呼ぶ、あの言葉なんですよ。神様に向かって、そんな風に呼べるって、どんなにすばらしいことか、一緒に学びましょう！

昔は奴隷のよつに…

はい、今から「奴隷と主人ゲーム」をしま〜す！先生から「奴隷ども、ご主人様の命令だ！〇〇しろ！」と言われたら、必ずその通りにしてね！（できれば少しの時間、実際にやってみてください）。

わかったでしょ？奴隷は主人の言うとおりにしなければなりません。奴隷には、自由がありません。主人は奴隷のことを大切に、なんか思っていないし、愛していません。言う通りにできないと、罰が与えられるんです。奴隷は主人のことを「怖いなく、やだなく、今度は何をさせられるんだろう…」とびくびくしっぱなしです。

「神様って、奴隷にとつての主人のようなお方だ！」イスラエルの人たちは昔、そう勘違いしていました。だから、言うことを聞かないと罰せられると思つてびくびく…。おきてを守ることをばかり考えていました。もちろん神様に向かって「アバ」「お父さん！」なんてとんでもない！なれなれしいそんな呼び方、恐ろしくてできませんでした…。

私たちも、イエス様を信じる前は、神様から叱られたり罰を与えられるのを怖がつてばかりいたのではないのでしょうか。神様に見張られているみたいで、遠くに感じられて、親しみやぬくもり、

愛なんか感じられませんでした。まるで「神様がご主人様で、私は奴隷」みたいに勘違いしていたんですね。

イエスを信じて神の子とされた！

でも、神様は遠く天から私たちを見下ろして、「言うとおりにしないと罰を与えるぞ」と見張っている怖い主人のようなお方はありません。私たちを愛し、この地上にひとり子イエス様をお遣わし下さいました。それは、私たちをどうしても、ご自分の子どもにしたい、そして愛を思う存分注ぎたい、と願われたからなんです。罪人である私たちは、そのままでは神様の子どもになれません。おきてを守って良い行いをする事で、神様の子どもになろうとしても、絶対に無理なのです。だからこそ、イエス様が私たちの罪を全部引き受けて、私たちに代わってのろわれた者となってくれました。十字架の血によって私たちがあがなってくださったのです。あがないというのは、代価を払って買い戻すことです。罪の奴隷から、キリストの命という尊い代価で買い戻し、自由にしてくださったのです。そうです、イエス様を信じ、心を開いてイエス様を内に迎え入れたその時、私たちは、神様に向かって、「アバ！お父さん！」って呼びかけることができる「神の子」とされたのです！なんてうれしいことでしょう！

神の子として生きよう！

実は、私たちが心から「アバ！お父さん！」って呼べるのは、イエス様の霊である聖霊が、私たちの内にいてくださったからなんです。このお方によって、天のお父さまとの、親しい豊かな愛の交わりが与えられるのです！どんな交わりでしょうか？イエス様はおっしゃいました。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」って。父なる神様の愛を信じてまっすぐに祈り求め、応えていた、だけ、という交わりです！それだけでなく、イエス様は「父よ、みこころならば、どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るよううにしてください」と祈られました。「わたしの思いよりも、お父様、あなたの御心こそが成りますように、お任せします！」安心してそう祈れる、そんな交わりすら与えられます。私たちの力によってではなく、内に居てくださる聖霊によって与えられる交わりなのです！

まとめ

せっかく神の子とされたのですから、安心して「天のお父さま！」「お父さん！」って祈り、親しく交わりましょう。喜びをもって神様にお従いしていきましょう。内におられる聖霊の力でね！

♪神様はね、実は♪

(教会学校さんびか2)

聖書 使徒9・1～19

テーマ 天からの光に照らされて

序論

(金井信生)

イエスの復活をありえないことと否定し、これを伝えていたキリスト信者たちを迫害していたサウロは、ダマスコ途上でキリストに出会いました。サウロはこの時を人生の転機として、キリストとの出会いを証しし、イエス・キリストによる救いを宣べ伝える最大の伝道者へと変えられました。

一、天からの光の経験

サウロは神に対して熱心な人でした。有名な律法学者であつたガマリエルのもとで律法を厳しく教育され(22・3)、また厳格におきてを守つて生活していました。それだけに、律法を越える教えを説いていたイエスに対して反発し、イエスの復活を事実として伝え、おきてを守り行うことなしに救いを宣べ伝えるキリスト信者たちに激しい怒りを覚えていました。それだけ自分の信じ行っているものが確かだと思つていたからです。

しかし、サウロの目の前に現れ、声をかけたのは主イエ

スでした。これまでイエスの復活を作り話と否定してきたサウロにとつて、自分のよりどころとしてきた確信の方が空しいものであつたことが明らかになつたときでした。

8章でエチオピアの宦官は、聖書を読んでもわかりませんでした。正しい導きを受けて、すぐにイエス・キリストを信じました。反対に、パウロは聖書をわかっているつもりでしたが、神様の救いについて、またメシアについて間違つた導きを受けていたために、イエスを否定してきました。しかし直接にキリストの語りかけを受けて、信じることができました。

その後サウロは、天からの光をもつてイエス・キリストを中心として見定めて、聖書を読み直します。そして、学んできた聖書が、メシアの苦難による救いについて、行いではなく神の恵みによる罪の赦しについてなど、イエスが救い主であることを示していることがはつきりとわかりました。また、み言葉に導かれて天からの光の中を歩む生涯に踏み出しました。

二、神の愛と救いの経験

目が見えなくなつてダマスコに手を引かれてきたサウロのもとを訪ねたのが、主の弟子アナニヤでした。当初アナ

ニヤは、主からサウロを訪ねるよう示されたとき、恐れていました。しかし、再度のお言葉を通して、神様がサウロを「救いの器」として選んでおられることを示され、出かけていきました。かつて「網を降ろしなさい」との主の言葉に従ったペテロは、大漁に驚き、主の弟子となりました。アナニヤも、「行け」との主の言葉に従ったところに、主の収穫があり、ご計画の確かさが現されました。

サウロは、主イエスの弟子の訪問に驚きましたが、それ以上に驚いたのが、本当なら許すことができない迫害者であり、自分を捕らえにきた男に「兄弟」と呼びかけて近づくアナニヤの姿です。サウロの目からうろこのようなものが落ちたのは、天からの光、キリストの言葉と共に、アナニヤの親しい語りかけのおかげでした。サウロは、「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈れ」（マタイ5・44）と自ら実践された主イエスの教えどおりに生きる人に出会い、愛と赦しが実現している、神の国の到来を見ました。

三、新しい人生の発見

サウロはアナニヤを通して、イエスの十字架と復活の救いを信じただけでなく、神様の与えられた使命について知りました。「律法によっては、罪の自覚が生じるのみであ

る」（ローマ3・20）と空しさを感じながらも突き進んできたパウロは、キリストに従う新しい人生を見出しました。それは自分を頼みとし、誇りとする生き方から、イエス・キリストを頼みとし、誇りとする生き方です。自分が神に愛され、赦されたように、人を愛し、赦し受け入れていく生活です。

サウロは生まれ変わりました。すぐに、イエスはキリストであると宣べ伝え始めます。後にパウロと名を変え、小アジア（今のトルコ）、ギリシャ、ローマに、さらに伝説によればスペインにも伝道しました。

迫害する側から迫害される側に変わり、様々な困難がありました。イエス・キリストによって救われた感謝と喜び、またキリストに従って生きる確信は生涯失われることはありませんでした。

結論

主がみ言葉を通し、また人を用いて与えられる天からの光に照らされ、キリストを信じて新しくされた恵みに生かしていただきましょう。

研究資料

(小平徳行)

サウロ（パウロ）の回心と召命のいきさつは、使徒行伝に3回記されている（9、22、26章）。これは、彼の生涯を根底から覆す一大転機となった。この出来事は、初代教会の福音宣教史に欠くことのできない重要性を有している。

テキスト

1～2 なおも サウロによる迫害の様子については8・

1、3に記されているが、その後サマリヤ传道の記事で中断されていた。しかし彼による迫害は、その間も続けられていた。**主の弟子たちに対する脅迫、殺害の息をはずませながら**、どれほどキリスト者に対して激しい怒りに燃えていたかが分かる。やがてサウロはイスラエルの領内にとどまらず、国外に逃れたキリスト者を追跡しようとした（26・11）。**ダマスコの諸会堂あての添書**、ダマスコはエルサレムから北北西に約240km離れたところに位置する。当時シリアの中心都市で、ローマの管理下にあり、ユダヤ人の住民が多かった。これは、サウロがダマスコに逃げ延びたキリスト者を逮捕する権限を

得るためのもの。大祭司はユダヤ議会の議長としてユダヤ人に対する権能をローマ政府の承認のもとに持つていたが、国外においてもユダヤ人およびその社会に対して強い権力を認められていたのである。**この道の者**、キリスト者に対する本書特有の呼び方（19・9、23、22・4、24・14、22）。それは初代教会が、主イエスに対する信仰を「いのちの道」「救いの道」と考えていたことを示している。

3 **天から光がさして** 時刻は真昼ごろであった（22・6、26・13）。この光は太陽よりも明るく輝き、主の栄光を示すものであった。この光はサウロの外側を照らしただけでなく、彼の内側を照らし、回心へと至らせ、迫害者を宣教者へと転向させることになった。

4～5 **わたしは、あなたが迫害しているイエスである** 呼びかける声の主は復活されたイエスであった。キリスト者への迫害行為はとりもなおさずイエス・キリストに対する迫害行為であった。このことはキリストと教会が一体であることを示している（ルカ10・16）。教会が苦しむ時、イエスご自身も苦しまれているのである。

6 **さあ立って、町にはいって行きなさい** これはサウ

口に対する配慮に満ちた命令であった。この時、サウロは急変した事態に十分に対処する能力を失っていたため、当座なすべきことだけを命じたのである。**あなたのなすべき事** キリスト者とは、自分のしたいことをするのでなく、キリストが望んでいることをする人である。

8 目を開いてみたが、何も見えなかった 神は人間に対し、しばしば、悪しき企てを止めたり、注意を引くために一時的に、目を見えなくすることがある(創世記19・11、列王下6・18・20)。この時は、サウロに迫害をやめさせるためでもあったが、迫害者への処罰というよりも、サウロの回心と召命に深い内省を与えるための恵みの手段であったといえる。

9 三日間 断食は祈りの時であった(11節)。この期間は、サウロにとつて、これまでキリスト者を迫害して、取り返しのつかない誤解と罪を犯してきたことについての悔い改めと、十字架につけられて死んだはずのイエスが復活したことについて深く考える機会となった。

10 アナニヤ 彼は「律法に忠実で、ダマスコ在住のユダヤ人全体に評判のよい」人であった(22・12)。この件以外では聖書に登場しないが、重要な使命を忠実に果

たしたのである。

11 『真ずぐ』という名の路地 この街路は今日もダマスコ東西に貫通する通りの一つとして現存し、言い伝えによれば、ユダの家はその西端の近くにあった。

15・16 わたしの名を伝える器として、わたしが選んだ者である 主はサウロを宣教の器として聖別された。伝える[キ]バスタゾー は「持ち運ぶ」が原意。

17 兄弟サウロよ サウロが迫害者であることを聞いていたアナニヤであったが、主の命令を受けて、兄弟としてサウロを歓迎した。キリスト者の愛と赦しを示す模範である。

18 サウロの目から、うるこのようなものが落ちて、元どおり見えるようになった この時、ただ肉眼が見えるようになっただけでなく、霊の目も開かれたのである。その証拠に、彼はキリストの名によってバプテスマを受けたのである。

参考図書 小野静雄「使徒の働き」『実用聖書注解』、斎藤篤美「使徒の働き」『新聖書注解・新約2』(以上のちのことば社)、I. Howard Marshall, Acts (The Tyndale New Testament Commentaries) など

聖書

使徒9・1-19

タイトル

天からの光に照らされて

暗唱聖句

天から光がさして、彼をめぐり照した。

使徒9・3

目標

天からの光に照らされ、キリストによる新生の恵みに生きる。

導入

(和田 治)

皆さんはこんな賛美の歌を知っていますか？

♪「誰でもキリストの 内にあるなら／その人は新しく つくられたもの／古きは過ぎ去り すべてが新しい／主の内にあるなら すべてが新しい」♪

そうなんです！全く新しく生まれ変わる！そんなすばらしいことって、あるんだらうか？と思うでしょう！あるんです！！今日は、天からの光に照らされて、まったく新しい人として生まれたパウロ（旧名サウロ）に、注目しましょう！

天からの光が！

「イエスを信じるだけで救われるだとか？ふっさけるな！けしからん！クリスチャンは神をバカにしている！許さんぞ！」、有名な律法学者ガマリエルのもとで律法を厳しくたたきこまれ、一生懸命におきてを

守って生きてきたサウロ。「おきてを守ることによってではなく、ただイエスを信じるだけで救われる、だの、イエスは復活した真の救い主だ、など、でたらめばかり言いおって！」そう思っ、クリスチャンを次々に捕まえて、牢屋にぶち込んでいました。

「クリスチャンを全滅させてやる！」サウロは、ダマスコのクリスチャンを、見つけたい縛り上げ、エルサレムに連行する許しをもらったのです。

ところが、ダマスコの近くまで来た時、突然、天から、太陽よりももっとまぶしい、ものすごい光がバーンと彼を照らしたのです。

「うわあああゝ！」地に倒れた彼の耳に、こう語りかける声が響いてきました。「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」

「い、い、いつたい、あなたはどなたですか？」

「わたしはあなたが迫害しているイエスだ。さあ立つて、町に入り、わたしの命令を待て。」

一緒にいた人々は、あまりのことに、口もきけずに立ちすくんでいました。彼らには、声は聞こえても、イエス様の姿は見えなかったのです。ようやくサウロは起き上がりましたが、なんと、まったく目が見えません。手を引いてもらって、やっとダマスコに入り、三日間、何も飲み食いせずに過ごしました。「なんてことだ…イエスが復活した、などであらめだと思ひ込んでいたが、イエスは生きておられたのだ！」

彼は天からの光に照らされて聖書を読み直します。そして気づいたのです！聖書は「イエスこそ救い主だ」とはっきり示している、と！「私はとんでもないことをしてしまった」、間違っていたのは私の方だ！天からの光の中で祈るサウロは、深い悔い改めへと導かれていたのです。

遣わされたアナニヤ

さて、ダマスコにアナニヤという人がいました。主は幻の中で、彼に語りかけました。「アナニヤよ。『はい。』『まっすぐ』という名の通りに行き、ユダという人の家を探しなさい。そこにサウロという人がいて、いま祈っています。わたしは幻の中で、アナニヤという人が来て、彼に手を置くと、もどおり見えるようになる、と知らせておいたから」。アナニヤは驚いて、叫びました。「主よ、サウロですって！あの男はエルサレムのクリスチャンをひどい目に会わせていると、聞いております」。しかし、主は言われました。「さあ、行け！サウロこそ、わたしの教えを世界中の人々に伝えるために、わたしが選んだ人だ。わたしのために彼がどんなに苦しまなければならないかを、彼に知らせよう」と。

そこでアナニヤは、出かけて行ってその家にはいり、手をサウロの上において言いました。「兄弟サウロよ。主のご命令で来ました。あなたが聖霊に満たされ、また見えるようになるためです」。

目が開かれたサウロ

するとどうでしょう！サウロの目から、うるこのようなものが落ち、見えるようになったではありませんか！しかも、心の目も完全に開かれ、イエス様を信じる信仰によって新しく生まれ、クリスチャンになったのです。すぐにバプテスマ（洗礼）を受け、食事をすまずと、すっかり元氣を取り戻しました！

彼は変わりました！でも、忘れてはなりません。天からの光、イエス様のお言葉と共に、彼を大きく変えたものがあつたことを。それはアナニヤの親しい語りかけでした。自分たちを苦しめ続けてきた人間を、こんなにも愛せるものなのか？サウロは、「敵を愛し、迫害する者のために祈る」本物の愛と赦しの光に打たれたのです。それは、アナニヤの光というよりも、イエス様の愛の光が鏡で反射したかのよう

結論

新しく生まれたサウロは、ものすごい勢いで、本当にたくさんの人々にイエス様の愛を伝えました。私たちも、聖書のみ言葉によって天からの光を受け、新しく生まれたのです！サウロのように、救い主イエス様を伝える者、そして、アナニヤのように、天からの愛の光を輝かせる者として生きましょう！

♪すばらしいイエスさまのうた♪

（教会学校さんびか39）

聖書 使徒16・6～10 テーマ マケドニアからの叫び

序論

(金井信生)

パウロの第二回伝道旅行は、行こうと思った方向が二度までも聖霊によってとどめられ、前には海しかないトロアスに導かれました。そこで見た幻によって、海を渡り、期せずしてヨーロッパ宣教の第一歩が記されることになりました。

一、行き場がなくなる時

第二回伝道旅行の目的は、第一回伝道旅行で生み出された小アジア地方の諸教会を訪問し、力づけるためでした。デルベ、ルステラと訪問しましたが、〈アジアで御言を語ることが聖霊に禁じられたので〉、西へ進み、北上しながら小アジア巡回に戻ろうとすると、〈イエスの御霊がこれを許さなかった〉ので、とうとう小アジアの西端、目の前はエーゲ海というトロアスに着いてしまいました(聖書地図参照)。

文字にすれば数行ですが、この間に一～二週間、あるいはそれ以上の時が経っていたと考えられます。「聖霊

に禁じられた」とはパウロが病気にかかっていたのではないかとの説もありますから、不安や恐れがあったかもしれないかもしれません。しかし、忍耐して主の導きを祈り待ち望むときが、次の大きなステップのために必要だったのです。

二、マケドニア人の叫び

トロアスでパウロは、ひとりのマケドニア人が〈マケドニアに渡つてきて、わたしたちを助けて下さい〉と懇願する幻を見ました。

パウロがこれまで想定していた伝道の対象ではない、海の向こう側の地域からの招きでした。しかしパウロは、神の招きと確信して、ただちにマケドニアに渡っていく決心をします。

そこには、「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない」(ヨハネ10・16)、「あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」(使徒1・8)など、主イエスのみ言葉の裏付けがありました。

また、救われるべきはすべての人ですが、〈ひとりのマケドニア人〉の救いを求める声に、パウロは応えてい

こうとします。マケドニヤ伝道において、ピリピではルデヤという婦人を導いてその家族も救われ、占いの霊につかれた女奴隷に解放を与え、獄屋に入れられますが、獄吏に「主イエスを信じなさい。そうしたら、あなたもあなたの家族も救われます」（使徒16・31）と福音を説きました。

主イエスも、その伝道は一人の悩みを聞き、苦しみに寄り添うものでした。「いなくなつた一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか」（ルカ15・4）と問いかけられたように、苦勞や困難が伴うとしても、救いを求める声に応えることが主の御旨の内を歩むことであり、また主の御顔を仰ぎ続けることのできる道、主が共にいて力づけてくださっていることを実感できる生涯なのです。

三、確信に立つ生涯

マケドニヤに渡り、ギリシャ宣教を始めてからのパウロの働きについて、聖霊の導きを受けていたことが使徒行伝に何度か記されています。第三回伝道旅行の最後には、エルサレムに帰つたら捕らえられることも聖霊に示され、預言者アガボを通して人々からエルサレムに戻ら

ないよう涙ながらの勧告を受けますが、パウロの心は揺るがずに、主の導きだけに従っていきましました。

私たちも、自分であれをしよう、ここに行こうとしているときは、楽しいかもしれませんが、思いがけないことで行き詰ると不安でいっぱいになります。

それよりも、主は私をどこに導こうとされているか祈り求めたり、また助けを求めている人、救いを必要としている人はいないか、耳を澄ましたり目を広く向けてみたらどうでしょうか。救いを求める声を聞くとき、それは主が私たちを遣わすために届けられた招きの声であり、主から遣わされていく時には、少々の困難があつても、確信をもつて全力を尽くすことができます。

結論

聖書は、イエス様に救われ、共に歩んでくださっている幸いを知る者は、その喜びを伝える使命が与えられていることを教えています。

私たちの周りにいる、救いを求めている人々の声を聞き取り、イエス・キリストに救いがあることをお伝えする者となりましょう。

研究資料

(小平徳行)

宣教は神ご自身が導いて進めておられる。ここは福音が小アジアからヨーロッパ大陸に伝播されるに至った経緯が記されている。この出来事は「人の心には多くの計画がある、しかしただ主の、み旨だけが堅く立つ」（箴言19・21）という真理の実例であつた。

テキスト

6 アジヤで御言を語ることを聖靈に禁じられた パウロ一行は、ガラテヤ州ルステラを出発しアジア州に行き、その中心であるエペソを伝道活動の舞台にしようと計画していたが、聖靈によって禁じられた。それは、心のうちに与えられた衝動であつたのか、一行の誰かたれによる預言的な言葉によつたのか、あるいは、何らかの事情で計画通りに行かなかつたことを聖靈による禁止と受け止めたのかもしれないが定かではない。この時には禁じられたアジア伝道であつたが、後に神はアジアの地での伝道の道を開かれた（19・10）。**フルギヤ・ガラテヤ地方** フルギヤはガラテヤ州とアジア州に属している。この地

名はフルギヤとガラテヤの二つの地方を意味しているのではなく、ガラテヤ州のフルギヤ地方を指していると考えられる（ラムゼー）。

7 イエスの御霊がこれを許さなかつた 禁じたのは6節では「聖霊」、ここでは「イエスの御霊」と表現の相違がある。具体的には何かは分からないが、先の場合とは異なり、イエス・キリストによる介入を意識させられる方法だつたのかもしれない。いずれにせよ神がパウロ達を確実に導いておられることを示しており（10節）、

この伝道旅行が人知を超えた確かな導きの中で進められていたことをルカは明らかにしようとしている。**ピテニヤ** 小アジア西北にある州で、文化水準の高いギリシヤ風の都市とユダヤ人居留地があつた。ペテロは後にピテニヤに手紙を書き送っていることから（1ペテロ1・1）、神は後にこの地にも福音を宣べ伝えさせたことを知ることができる。

8 ムシヤを通過して、トロアスに下つて行つた 聖靈によつて禁じられた結果たどりついたのは、予定外の地であるエーゲ海沿岸の港町トロアスであつた。実にルステラからここまでの道のりは約700kmであつた。

9 これまでの一連の神の禁止は、積極的な導きに変わる。**幻** 幻や夢は当時、神が人間と意志の疎通を図るための手段として認められていた。使徒行伝ではしばしば幻によって宣教が展開して行ったことが記されている。

幻によって、アナニヤがサウロの回心、召命のために用いられ(9・10・19)、ペテロとコルネリオを通して福音の扉がユダヤ人から異邦人へと開かれた(10・11章)。もし、これらの幻がなかったなら、キリスト教はユダヤ教の一派でとどまっていたかもしれない。このように幻は人間の固定観念を打ち砕き、神の御心を悟らせるために用いられたのである。**ひとりのマケドニヤ人** これがルカであったと断定する資料はない(そもそもルカは異邦人であるが、ギリシヤ人であったという確証はない)。しかし彼はトロアスの地でパウロと出会い、福音宣教に新しいビジョンを与えたという想像はあり得ないことではない。

10 **神がわたしたちをお招きになったのだ** パウロは即座にこの幻を、マケドニヤに福音を宣べ伝えるようにとの神からの招きであると解釈した。この時、ようやく二度も聖霊に禁じられた意味を理解できたに違いない。確

信して[キ]スンビバゾー 元来「結び合わす」の意味である。9・22では「証明する」という意味で用いられている。この語はいろいろな証拠から一つの結論を引き出すことを表すのに使われる。未知の新しい大陸に出かけて行く事は冒険であったが、パウロにとっては、主から与えられた異邦人伝道という使命(9・15)と一致するものであった。**わたしたち** ここで突然、語り手が一人称複数形となる。本書ではこのような「私たち章節」がしばしば出てくる(16・10・17、20・5・15、21・1・8、27・1・28・16)。これは著者ルカが一行に加わり、彼が直接目撃した伝道旅行記をつづっている箇所であることを示している。ルカはこの時から、医者としてパウロの伝道を助けるようになった。**ただちに** 神の御旨が分かったなら、即座に従うべきことを教えられる。

参考図書 小野静雄『使徒の働き』『実用聖書注解』、斎藤篤美『使徒の働き』『新聖書注解・新約2』(以上いのちのことば社)、B・F・バックストン『使徒行伝講義』(バックストン記念霊交会)、I. Howard Marshall, Acts (The Tyndale New Testament Commentaries) 他

聖書

使徒16・6～10

タイトル

マケドニアからの叫び

暗唱聖句

マケドニアに渡ってきて、わたしたち

を助けて下さい。

使徒16・9

目標

救いを求めている人々を覚え、宣教への招きに応答する。

導入

(和田 治)

はい、クイズです！学校で大事なことは？そう、勉強することですね。ケーキ屋さんで大事なことは？そう、おいしくいケーキを作って売ることです。病院で大事なことは？そう、けがや病気を治すことですね。じゃあ、教会で大事なことは？んん…、あまり考えたことないかな？実はね、教会ですごく大事なことは「イエス様のことをみんなにお伝えすること」なんです！それを「伝道」って言いますよね。さあ、今日のテーマは、教会ですごく大事な「伝道」についてです！

『ストップ！』って聖霊が…

「むむむっ…おかしいな。アジアの人たちにイエス様による救いを伝えたいのだが…」。パウロたちは二回目の伝道旅行（イエス様を伝える旅）に来ていました。一回目の伝道旅行で

生み出されたアジアの教会を力づけるためにやってきた旅です。それなのに、不思議なように道がふさがれるのです。祈っても祈っても「ストップ！そっちに進んではなりません」と聖霊がお止めになるのです。とうとう、初めに予定していたのとは逆の、目の前にはエーゲ海が広がるトロアスに着いてしまったのです。「いったいどうなっているんだろう。伝道しようとしてるのに聖霊がストップしておっしゃるなんて」一週間も二週間もかけて、パウロたちはひたすら祈りながら進み、とうとうここまで来たのです。

マケドニア人の幻

その夜、パウロは一つの幻を見ました。幻の中で、海の向こうに住むマケドニア人が、しきりに頼むのです。「マケドニアに渡ってきて、わたしたちを助けて下さい！」うめくように、何度も何度も訴えるその幻は、パウロの心に強く焼きつきました。「そうだったのか…」そしてパウロは言いました。「みんな！海の向こうの人々のところに、主が私たちを招いておられるに違いない！彼らが救いを求めて『助けて下さい！』と叫んでいるんだ！」パウロたちは伝道のために海の向こうに渡ることになりました。だって、祈りの中で、神様がそこに導いておられるっていう確信が与えられたのですから！

伝道のための三つの「はてな？」

パウロたちの歩みから、伝道のために大切な三つの「はてな？」について考えてみましょう。

①「祈っているかな？」

まず、「ほくは、私は、伝道のために祈っているかな？」って問いかけてみましょう。パウロたちには聖霊が「ストップ」っておっしゃるのがわかりました。祈っていたからです。海の向こうなんて、行く予定はありませんでしたが、そこに招かれていると確信しました。祈っていたからです。パウロたちは、「伝道は人間のわざではない」、と知っていました。それは「聖霊」の力によるのです。伝道で何よりも大切なのは、聖霊のお導きに従うことなのです。聖霊のお導きは祈っていてこそわかるのですね。

②「助けを求めているのは誰かな？」

マケドニヤ人が「助けて下さい！」って叫んでいたように、私たちの周りでも、「辛いよ、寂しいよ、死ぬのが怖いよ、どうやったら救われるのか知りたいよ、助けて！」って誰かが叫んでいるに違いありません。お友達や家族の誰かの心の叫びが聞こえますか？あなたの心の耳を澄ませてみましょう。そして、「助けを求めているのは誰かな？」って、祈りな

がら考えてみましょう。そして、まず「二人」に伝えてみましょう！パウロが見た幻も、「二人」マケドニヤ人だったでしょう？

③「伝道者に選ばれているのかな？」

パウロたちは、イエス様のことを人々に伝えるために、すべてを献^{ささ}げて従いました。伝道は、誰も何もしなくても勝手に進む、ということは絶対にありません。機械やロボットにも伝道はできません。神様に従う「人」が必要なのです。もしかしたら、神様はあなたを、パウロのように、イエス様のことをたくさんの人々に伝える働きに用いたい、と願っておられるかもしれません。だから、「伝道者に選ばれているのかな？」って考えてみてほしいのです。もし神様から「伝道者になりなさい」って言われたら、「はい、従います」と言えるでしょうか？

まとめ

今日のお話でよくわかったでしょう？「伝道」はしてもしなくてもどちらでも良い、というものではありません。どうしてもしなければならぬ、ととても大切なことなのです。イエス様のことを知っている人だけがイエス様のことを伝えることができるのです。三つの「はてな？」を忘れず、思い切って伝道しましょう、聖霊の力によつて！

♪用いたまえわが主よ♪ (ホーリネス・こどもさんびか113)

牧羊ひろば



柏原教会教会学校

● 柏原教会沿革

一九三二年（昭和七年）、英国の貴族ドロシー・エレン・ホーア宣教師により日本伝道隊の働きとして、大正通りに伝道が開始されました。当時の柏原町は、中河内郡では人口第一位の町でありました。ホーア師は、幾多の困難に直面しながらも、この地にキリストの教えを祈りをもって伝えられたのです。戦後の一九四六年、日本伝道隊の向後昇太郎牧師夫妻を迎えて5人の信徒によって教会の復興がなされ、その後、梅原貞治郎牧師夫妻、川原崎晃牧師夫妻、現在の西本耕一牧師夫妻へと引き継がれております。この間一九五四年に、現在地へと会堂が移されました。この会堂は、元酒蔵だった所を改装して使うようになったため、「赤レンガの会堂」として有名でした。酒蔵の中へ子どもや大人が入っていき、そこ

で礼拝が持たれているのを想像してみてください。隔世の感がありますね。

その後一九八一年に、4階建ての新会堂が建立され、その間に、羽曳野教会と西大和キリスト教会を生み出して参りました。この二つの教会とは、現在も姉妹教会として色々な行事で交わりをもっております。

● 教会の地理的背景

柏原市は、中河内の最南端で、JR大和路線、近鉄大阪線、近鉄南大阪線が通過する大阪府と奈良県を結ぶ要路とも言える位置にあります。信貴生駒しぎいこまの山々と大和川石川の合流に接しており、地形的に今以上の住宅の急激な開発は見込めない状況であり、人口の増加も殆んど見込めないと考えられます。教会周辺は比較的古い家並みですが、教会の位置は、JR柏原駅から徒歩3分、近鉄堅下駅から徒歩15分と集会に來やすい場所に有ります。

● 礼拝と分級

礼拝は毎週日曜日に十時半から「牧羊者」をテキストにして行われます。出席者は、大体6〜7名です。しか

し、毎月一回ボーイスカウトのカブ・ビーバー隊と一緒に
 になりますので、その時は20名位増えます。礼拝内容は
 大人の礼拝と変わらず、白板に書かれた礼拝順序に従っ
 て行われます。又、み言葉と暗唱聖句は別の白板に書か
 れており、礼拝の前後に、又、メッセージ中に、教師か
 ら突然指名されたりして「えーっ、何やったかなー」と
 言いながらも元気に答えてくれます。メッセージは、各
 先生のキャラクターが表われ、紙芝居、フランネルグラ
 フ、み言葉カードによって進められています。たまには
 腹話術人形のケンちゃんも登場します。献金のお祈りは
 子どもたちの唯一の奉仕です。早口有り、小さくボソボ
 ソとお祈りしたりしていますが、これも大きくなった時
 の思い出となり、お母さんたち（元教会学校生徒）に言
 うと「えーっ、私らの時は先生が
 祈ってはったのに、今度、しっか
 り祈れるように言うとかわ…」で
 すって。



TKR

て行っており、生徒手帳に暗唱聖句を記入しています。
 上級生は今日の話の復習を聞くようにしており、お祈り
 は生徒と手をつないで祈ります。これによりスキンシッ
 プが持たれています。特に二人の6年生は洗礼を受けて
 おり、第一主日は聖餐式せいさんしきを受けるため大人の礼拝に合流
 しています。

幼稚科は簡単な工作や紙芝居です。なれない手つきで
 ハサミを使っているのが微笑ましいですよ。

『御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても』

Ⅱ テモテ4・2

このみ言葉のもとに教師は教職一名、信徒八名です。
 最高齢は74歳の兄弟ですが過去、90歳過ぎまで現役で頑
 張られた兄弟が居られたので、「まだまだ若い者には負
 けられん」と先頭を切って活躍されております。

●年間行事

他教会とよく似た内容ではないかと思いますが、

・三月 *進級式・一年間の出欠に応じて金・銀・銅

のメダルを頂きます。

・四月 *イースター・近所の大和川河原に集合して

ボーイスカウトと一緒に早天礼拝を守っています。教師の即席劇、大紙芝居などでイースターの本当の意味を教えてもらい、その後サンドイッチとイースターエッグを戴いて帰ります。雨天の時、教会の礼拝堂で同じような早天礼拝を行っています。

＊ちなみにボーイスカウトは、柏原教会を本部として活動しており（今年発団45周年）、ボーイスカウトの最高の富士賞をとるために10回以上の礼拝出席、一回2時間の聖書の講義を10回、合計20時間義務付けされています。講義をする牧師が大変ですが、昨年は他教会からも受講し、五名が合格しました。

・五月
＊母の日・教会のご婦人に教会学校より毎年、カーネーションを送っています。

・六月
＊花の日・礼拝後、近所の交番、消防署、老人ホームへ花を持つて慰問に行っています。消防署では運転席に座らせて頂き、「ハイ、チーズ」という風景も見られます。老人ホームでは一緒に童謡を唄ったり、肩叩きをしてあげます。



夏期学校集会



夏期学校スイカ割り

・七月
＊サマースクール・夏休みに入つて直ぐに教会へ集まり、科学実験やマジック教室、簡単なお菓子作りをして半日過ごします。

・八月
＊ファミリーキャンプ・

毎年、一泊二日のキャンプです。牧羊者のテキストを使って楽しいキャンプファイヤー。高学年はこの時期、決心をして洗礼を受けられるよう指導されます。

・九月
＊敬老の日あいさんかいの前日に楽しいぶどう狩りをし、翌日の敬老愛餐会に皆でいただきます。



夏期学校キャンプファイヤー

・十月

*大阪教区の教会学校教師研修会に全教師が参加するようにしています。

・十一月

*芋ほり・楽しいサツマイモ掘り。虫を捕まえるのも楽しい収穫感謝の時です。



子ども祝福式

・十二月

*幼児祝福式・牧師先生に一人ひとり名前を挙げて祈って頂きます。てれくさいけれどもうれしいひと時です。

*クリスマス・第一部で礼拝し、献金を町の善意銀行、キリスト教施設に捧げ、第二部で約一ヶ月前から分級の時間に練習した降誕劇、トーンチャイム、ハンドベルの発表をボーイスカウトのカブ・ビーバー隊と一緒にを行い、なぞなぞやゲームにチャ



CSクリスマス

・二月

レンジ、最後にサンタクロースからお土産をもらい、キャロリングに出かけます。毎年、行うので街の方々も写真を撮って下さいます。キャロリングから帰った後に頂く、パンとジュースは最高!!

*元旦礼拝・十一時から親子礼拝を行い、礼拝出席者全員で記念写真です。

*餅つき・全員、一回だけ杵きねを持たせてもらいます。杵取りをする先生方のヘッピリ腰。後でワイワイと写真を



CSクリスマス降誕劇



CSクリスマス合奏



餅つき大会

見ながら、つき立てのお餅をいただきます。

この他、春と秋の子ども大会をカブ・ビーバー隊と一緒にしています。礼拝で、お話、ビデオを観賞した後、歌やゲームなどをして遊びます。毎年、趣向を変えるようにしていますが、腹話術のケンちゃん、何時も大人気。触らせると迫られるので、始まるまでは手ぬぐいを泥棒被りして避難しています。又、教会では少子化時代に入り、子どもの数が少なくなっており、対応する為に、次のようなことをしています。

(1) 公園伝道

土曜日の午後三時に近くの公園に出かけていき、紙芝居、ゲームを主として行い、その間に少しだけ神さまのお話を加えています。最近、孫の世話をしている方や若い主婦も時々、輪に入ってくれます。

(2) キッズブラウン

英会話教室を昨年から始めています。四歳時からを対象として毎週、水曜・土曜に行っています。去年から小学校でも英語を始めるといふ文部省の方針を聞いて始めたのですが、予定した人数が集まらず苦勞しています。ただ、奉仕者（CS教師以外にも信徒の姉妹が協力）は、

熱意を持って教材に取り組んでおり、将来は多くの生徒が集まるものと祈っております。

これらの行事をスムーズに行うため、毎月第二主日に教師会を持ち、学びと祈り、又、行事予定についてケンケンガクガク意見を戦わせます。

この教師会は、中高生の先生方（五名）とも一緒です。ちなみに中高生は、昨年から中学生になると教会に来なくなる生徒のため牧羊者を中心にした第一礼拝で朝、九時から学んでいます。第一礼拝ではワシシップ中心の讃美歌やギターも用いられ、子どもたちが来やすい雰囲気作りもしています。

今年、柏原教会は創立八十周年を迎えました。今、CS教師は主婦が多く遠隔地から来られる方も多いのですが、このために夕食の支度も遅くなるというので教会へ来る前に準備してくるそうです。この先生方の熱意が必ず報われ、多くの生徒が集まってくることを願ってやみません。

（上田浅雄）



教会バザーCSコーナー

一 お わ り に 一

『牧羊者』二〇一三年度第Ⅰ巻をお届けできますことを感謝します。また、執筆者のご労苦に感謝いたします。二〇一三年度カリキュラム解説」を記していますので、参考にしてください。今回の教師養成講座は、金井由嗣師に「カウンセリング・個人伝道①」を書いていただきました。「牧羊ひろば」は、柏原教会のCSを紹介していただきました。

今号の執筆者、奉仕者を紹介いたします。

『牧羊者』のご購読・ご利用について

*分級用に、ワークA（幼稚園向け）、B（主に小学生1～3年生向け）、C（主に小学生4～6年生向け）を用意しています。また、付録として「子ども聖書日課」、「フラッシュカード」、「み言葉カード」、「中高科へのヒント」があります。いずれも、下記ホームページから無料でダウンロードできます。送付ご希望の方には、ワークは各630円（税込）でお送りします。

信徒局 教会教育室ホームページ
<http://cs.jccj.info/>

*ご注文は、日本イエス・キリスト教団（事務所）まで。申込み、部数変更等のための用紙も、上記ホームページからダウンロードできます。

神戸市兵庫区塚本通3-3-19
 電話 (078) 575-5511
 F A X (078) 575-6611

聖書講解	高橋頼男師	金井信生師	石田高保師
研究資料	水川武志師	大頭眞一師	
	宮澤清志師	金井由嗣師	小平徳行師
メッセージ例	中島啓一師		
	松浦みち子師	水野晶子師	和田 治師
ワーク(A)	飯田勝彦師		
(B)	鎌野 幸師	吉田美穂師	小菅央子師
(C)	竹崎光則師	勝田幸恵師	
中高科へのヒント	石田恭子師	田中裕明師	
子ども聖書日課	石田高保師	後藤健一師	
フラッシュカード	田中愛子師	金田ゆり師	小野淳子師
	松浦あん姉	青木みぎわ姉	丹羽 遥姉
	土屋直子師		
イラスト	丹羽 遥姉		
ワープロ打ち込み	田中愛子師	金田ゆり師	多田豊子師
校正	長田栄一師	加藤 清師	山田和幸師
	長尾秀紀師	長尾明美師	

また、発送の教団事務所の兄姉、印刷の松木共栄印刷、菱三印刷に心から感謝いたします。

（長尾秀紀）

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇一三年度Ⅰ巻

二〇一三年四月一日発行

発行所 日本イエス・キリスト教団信徒局 教会教育室
 企画監修 日本イエス・キリスト教団信徒局 教会教育室

印刷所 菱三印刷株式会社
 〒105-8561 東京都港区新橋3-1-1
 電話 〇七五五-五七五二
 F A X 〇七五五-五七五二
 電話 〇七五五-五七五二

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み